第29次研究プロジェクト

研究紀要

『子どもの育ちを喜び合う記録の開発と検討』
～子どもや保護者と共有するための可視化や発信～

令和４年９月

一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

発刊にあたって

新型コロナ感染症への対応が続く中、「幼児教育の充実・質の向上のために、研究や研修を止めない」という思いで、感染防止に工夫し、第29次プロジェクトが始まりました。そして、本プロジェクトでは各参加園の先生方が、『子どもの育ちを喜び合う記録の開発と検討』～子どもや保護者と共有するための可視化や発信～ という、今の幼児教育にとって重要な課題のひとつであり、また難しいテーマに積極的に取り組んでいただきました。活動は４グループに分かれて、様々な切り口から課題にアプローチし、多角的な研究紀要となっておりますので、ぜひご覧くださいますよう、どうぞよろしくお願い申しあげます。

さて、小学校以上の教科教育中心の教育活動においては、テストや通知簿で子どもたちの成長や能力の獲得の一面を比較的わかりやすくとらえることができます。（※もちろんそれら以外の重要な成長過程があることは言うまでもありません）

一方、幼児教育においても、楽器の演奏が上手になったり、走るのが速くなったりなどの目に見えてできることなどで、一定の成長の評価ができます。しかしながら、（幼児教育の専門家である先生方には釈迦に説法となり恐縮ですが）発達の差がはげしい幼児期においては、前述した目に見える子どもたちの成長に加えて、個々の子どもたちが活動の中で興味や意欲をもったり、新しい発見をしたり、友達と話し合い協力する力がついたりするいわゆる社会情動的スキル（非認知的能力）などの目に見えにくい育ちが重要になります。

今回のプロジェクトの意義を私なりに考えたときに、主に二つのことがあげられると思っています。

ひとつは、子どもの育ちや教育活動の可視化を通して、保護者の皆様に目に見えにくい子どもたちの成長をしっかり伝え、子どもたちの育ちを共有していくことにあると考えます。おそらく保護者の方々の立場からすれば、先に挙げた目に見える成長に目が行きがちであろうと思われますが、私たち幼児教育に携わる者としては、後者の目に見えにくい成長を知って欲しいという願いがあります。また、こうした成長が幼児期にとって大切なことであるということを保護者の皆様に理解して欲しいという思いがあります。

いまひとつは、「幼児教育は未来への投資である」という言葉が世に出て久しくなりますが、世間一般の人々や幼児教育予算を決定したり執行したりする政治や行政に携わる方々は、子どもの成長をどのように捉えられているかということも、考える必要があります。もし、先に挙げたような目に見える成長だけが幼児教育の目的や成果と捉えられているのであれば、本プロジェクトにある「可視化」を通じて目に見えにくい成長があることを理解していただき、さらに幼児教育への投資を充実できるよう働きかけることも必要です。

末筆になりますが、様々なご助言を賜りました香川大学の松井剛太先生に御礼を申しあげ、また教育研究所所長の岡部祐輝先生をはじめ第29次プロジェクトで活動を進めてこられた諸先生方に感謝申しあげます。そして、本書をご覧いただき、「子どもたちの成長の記録や可視化」という命題に関心をお持ちいただくようお願い申しあげます。同時に、子どもたちや保護者とも育ちの過程を共有していただき、さらに広く世の中の人々に幼児教育の意義や重要性を伝えていただきますことをお願い申しあげます。

（一社）大阪府私立幼稚園連盟
理事長　奥　野　　宏

目　次

第１章　保護者に伝えたい育ちの過程 ―― 3

1）はじめに ―― 5

2）実践事例 ―― 8

3）各園で様々な取り組みをした結果 ―― 22

4）まとめ ―― 23

第２章　子ども理解を深めるために、子どもの姿を教職員間で共有するための効果的な方法について ―― 25

1）Episode１　～子ども理解を職員間で共有したい～ ―― 27

2）Episode２　～反省を受けて再度考えてみた～ ―― 31

3）Episode３　～動画で実践を深める～ ―― 42

4）まとめ ―― 43

第３章　「つい語りたくなる」保育の可視化とは ～アンケート・実践を通して見えてきたこと～ ―― 45

1）研究テーマ①「保護者に向けたドキュメンテーション」について ～アンケート結果から見えてきたこと～ ―― 47

2）研究テーマ②『つい語りたくなる』記録とは ―― 60

3）全体のまとめ ―― 71

第４章　見たい！知りたい！伝えたい！　～明日の保育に繋がる保育記録～ ―― 73

1）研究の目的 ―― 75

2）『日々の保育記録』について感じていること ―― 76

3）第４グループが見つけた問い！ ―― 77

4）保育の記録がもつ意味とは… ―― 77

5）実践事例 ―― 78

おわりに… ―― 95

第29次プロジェクトチーム参加者

香川大学　教育学部	松　井　剛　太
ひじりとよかわ保育園	安　在　佑美香
認定こども園清香学園幼稚園	池　田　早矢香
幼保連携型認定こども園 常磐会短期大学付属いずみがおか幼稚園	池　田　なつみ
認定こども園新光明池幼稚園	井　上　愛　純
幼稚園型認定こども園豊中みどり幼稚園	川　越　恵美子
白鳩羽曳野幼稚園	佐　近　美　絵
認定こども園あけぼの幼稚園	佐　藤　友　理
認定こども園小松幼稚園	塩　田　奈　緒
認定こども園熊野田幼稚園	砂　山　俊　介
大阪樟蔭女子大学附属幼稚園	豊　田　朱梨亜
幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園	中　島　　円
大阪商業大学附属幼稚園	西　口　知　里
認定こども園せんりひじり幼稚園・ ひじりにじいろ保育園	畑　中　菜　摘
認定こども園せんりひじり幼稚園・ ひじりにじいろ保育園	福　岡　加　菜
幼稚園型認定こども園とよなか文化幼稚園	松　田　惇　生
認定こども園おしお幼稚園	安　本　親　之
認定こども園朋来幼稚園	山　佐　亜由美
認定こども園御幸幼稚園・さくらんぼ保育園	山　田　亜佑未
幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園 (一社)大阪府私立幼稚園連盟教育研究所　所　長	岡　部　祐　輝
幼保連携型認定こども園光の園幼稚園 (一社)大阪府私立幼稚園連盟教育研究所　副所長	小　池　聖　子

【第29次プロジェクト設立と活動の経緯】

「幼児教育は見えにくい育ちが多い教育である」と考えられます。子どもたちが日々、遊びや生活の中で学び、そして育っていることは間違いありませんが、「どのように学んでいるのか」、「何が育っているのか」ということを明確に捉え記録し、伝えていくことは大変難しいことであります。また保育者の専門性が要求されることであるとも考えられます。

幼稚園教育要領解説（平成30年）では、「評価の実施に当たっては、指導の過程を振り返りながら、幼児がどのような姿を見せていたか、どのように変容しているか、そのような姿が生み出されてきた状況はどのようなものであったかといった点から幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるものなどを把握する……」という記述があります。小学校教育のように通知表や得点などを伴う成績で評価がなされない幼児教育における評価は、まさに子ども一人一人の興味関心をはじめとする「子どもの姿」を丁寧に捉え、記録することが大切です。

そこで当連盟教育研究所では、香川大学の松井剛太先生にご助言をいただきながら、第29次プロジェクト、『子どもの育ちを喜び合う記録の開発と検討』～子どもや保護者と共有するための可視化や発信～をスタートしました。ただ記録し発信するだけではなく、子どもの姿を見取り記録し発信したものを通して、保育者どうし、保育者と保護者、そして保育者と子どもなどが育ちを喜び合えるものとなっていくことをめざし、実践・研究に励んできました。

参加メンバーは各自でプロジェクトのスタートから問いや課題意識を持ち、積極的に取り組んできました。当初は、「記録」、「可視化」、「発信」という視点や、「子ども」、「保護者」、「保育者」という視点をもとに、各園の様々な事例を持ち寄り、討議を行う中で、グループに分かれ課題意識をもとに一定期間、各園での事例収集、そして例会での事例の検討や協議を行ってきました。そのメンバーが協議し、考えてきた過程が本紀要に多数掲載されています。ぜひお読みになる皆様におかれましては、各園の事例の結果部分だけではなく、どのような課題意識や、ねらいをもって、保育の記録、可視化、発信を各園が行ってきたかという部分をお読みいただければ幸甚です。

２年間のプロジェクトは、コロナ禍における幕開けとなり、感染拡大状況を鑑み、例会の一定回数がオンライン上でのやりとりとなりました。様々にコミュニケーションや、討議を進める上で不都合な状況もあったことと思いますが、メンバー各自がそれぞれに高い課題意識と何より、「幼児教育の子どもたちの育ちを、多くの方に理解してほしい。伝わってほしい」という高い熱量があったからこそ、この難局を乗り越えプロジェクトを前に進めることができたものと思います。

今後益々、子どもの育ちを記録し保育を伝えていくことは大変重要なことになると考えられます。そのような時代を前に、本紀要が加盟園の皆様のこれからの取り組みを支える大きな手掛かりとなれば幸いです。

末筆になりますが、２年間お支え頂きました、松井剛太先生に深く感謝申しあげます。また、歩みを止めず進めてきた第29次プロジェクトメンバーの努力に敬意を表します。

（一社）大阪府私立幼稚園連盟

教育研究所　所長　　岡　部　祐　輝

第Ⅰ章

保護者に伝えたい育ちの過程

1）はじめに
2）実践事例
3）各園で様々な取り組みをした結果
4）まとめ

1）はじめに

子どもの姿を可視化・発信し保護者に伝えていくことで、保護者と子どもの育ちを共有ができ、さらなる子どもの育ちに繋がるのではないかと考え、様々な方法で各園が取り組みをしてまいりました。写真や動画、SNS等を用いて子どもの姿を伝えていく中で私たちが感じている子どもの育ちをちゃんと伝えられているのだろうか？なんだか保護者との間にずれがあるのではないだろうかという疑問点が出てきました。

そこで、どうしたらもっと子どもの様子をわかりやすく保護者に伝えられるのかな…と自分が何を大切と思っているのか出し合うことにしました。

チームでの対話の中で…

私たちが大事にしているのは、子どもたちの育ちを伝えることであり、それは“着替えが一人でできるようになった”ということや“初めて完食できた”ということ等、『○○ができるようになった』という結果ではなく、“そこに至るまでの過程”ということだと改めて確認し合いました。そこに何の力があるから結果できるようになるのか、それを支えている力は何かを考え、『子どもの育ちの過程』の大切さに着目し、目に見えてわかる育ちや結果だけでなく社会情動的スキル（非認知能力）などの見えにくい育ちを保護者に可視化・発信していくことで保護者間で、もっと子どもたちの多面的な「育ち」の様子を共有することができるのではないだろうか？と考えました。

保護者に伝えたい育ちの過程

よし、子どもの育ちの過程をどんな方法で伝えていけばいいか探ってみよう！！

それにはただ「こんなことがありました」と伝えるだけではなく、子どもたちの育ちを解りやすく伝えるにはどのように伝えていけばいいのかを考え、そのことで保護者と共に同じ方向性で支え合えるようになればと願いを持ち、取り組むことにしました。

各園で様々な実践をしていき、成果が見えにくい育ちを保護者に可視化・発信することにより、保護者への伝わり方や子ども理解・育ちに変化はあるのか等を探ります。

私たちが取り組んできた歩み（過程）を読んでいただき、可視化・発信することの良さを感じたり実践してみたいと思っていただけたら幸いです。

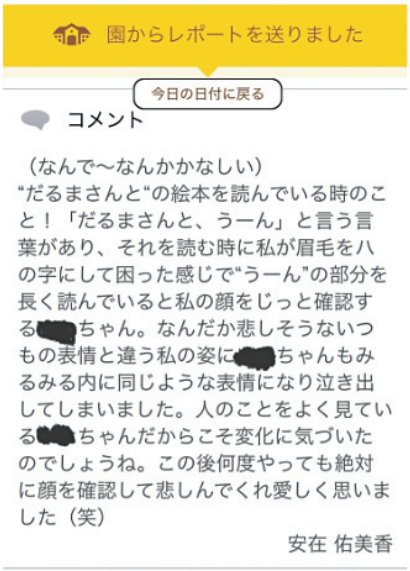
●各園で行っている主な方法をお伝えします

写真で伝える

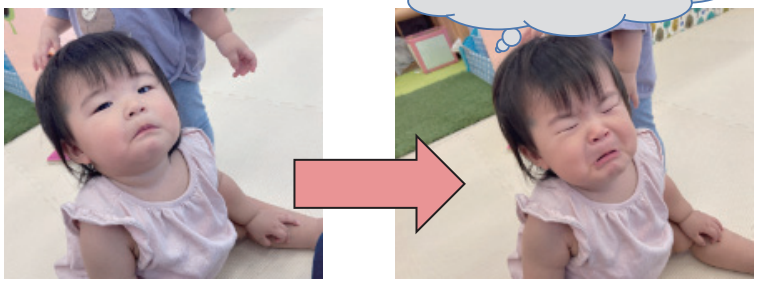
ポートフォリオ

月に１度のお帳面のメッセージをポートフォリオに変更して園での子どもの姿・保育のねらいを伝える

写真に吹き出しをつける



写真に子どもがこう思っているだろうという吹き出しをつけ、そこに保育者の子どもの見取りのコメントも載せる



ドキュメンテーション

降園時に保護者と子どもたちの写真を実際に見て、エピソードを話しながら遊びの中での学びや成長を伝える

動画で伝える

・動画で子どもの様子を撮影し、テロップをつけて配信。

制作展に向けて、制作している様子を伝えた。子どもたちがハサミを使って考えながら制作している様子や、友達と協力して作り上げる様子を撮影。

SNSで伝える

・キッズリー
・instagram
・ブログ　　などのSNSを使用して発信

キッズリー

instagram

ブログ

2）実践事例

朋来幼稚園

実践事例　1　～ポートフォリオを使って保護者・保育者・子どもへ発信～

＜保護者へ向けた発信＞　連絡帳の言葉書き代わりにポートフォリオを実施（月1回）

（写真とその写真に対して、担任がメッセージを書き子どもが持って帰り、保護者からは、メッセージまたは印鑑を押して返してもらいます。
また、年度末に1年分を綴じて持って帰ります。（一年の成長の記録））

・今まで園内の子どもの様子は主任が写真を撮っていましたが、ポートフォリオをきっかけに子どもの成長を一番近くで見ている担任が撮るようにしました。

＜成果＞

・写真があるので、子どもの様子や成長が保護者に伝わりやすい。
・子どもの成長の振り返りになる。

＜課題＞

・保護者からのメッセージがなく印鑑のみの保護者は、どう感じているのか？

ポートフォリオを保護者に向けた発信として使っていましたが、
保育者や子どもに向けた発信方法としても使えるのではないかと考え実施してみました。

＜保育者へ向けた発信＞　ポートフォリオを使っての園内研修

（写真から子ども理解を深め、担任のメッセージの書き方・内容で良かったところを付箋に書いて話し合いをしました。）

・事前に担任にアンケートも実施。（Googleを使用）
⇒ポートフォリオをやってみて良かった点と難しいと感じている点を聞きました。
良かった点では、保護者に伝えられていない子どもの様子を見てもらえることや写真があるので保護者に伝わりやすいという意見が多かったですが、難しいと感じている点では、保育中に写真を撮ることが難しいという意見が多かったです。

＜成果＞

・ポートフォリオのやり方や子どもの成長について話し合うことができ、保育者間で共有ができた。

＜課題＞

・写真の撮り方や選び方が難しいと感じている保育者が多かった。

＜子どもに向けた発信＞　ポートフォリオを子どもたちが見る

（保護者向けに発信しているポートフォリオを先に子どもに見せてから持って帰ってもらいました。）

・いつもおとなしく一人遊びが多いAが弟と一緒に写っている写真を見て、友達に見せて話しかける姿がみられ、また、保育者からのメッセージを読んでほしいと言う子が多く見られました。
・子どもが先に見てから持って帰ったので、お迎えの時に子どもからポートフォリオを保護者に見せる姿が見られました。

＜成果＞

・子どもの新たな一面が見られた。
・子どもどうしで良いところを見つけ合う姿が見られた。

＜課題＞

・保護者に向けてメッセージを書いていたため、漢字が読めず読んでほしいという子がいた。

実践事例　2

大阪樟蔭女子大学附属幼稚園

保護者目線での過程とは？何かを考えたとき、運動会や製作展などの　行事　は、
保育者は次につながるものでありゴールのない育ちの過程とも考えていますが、
保護者の目線では当日があるために分かりやすいよう今回は　行事　をゴールのある過程
自由遊びや日頃の子どもの育ちを、ゴールのない過程と仮定させていただきます。

ゴールのある過程＜行事＞

年長組の運動会に向けての取り組みの事例です

年長になったらできるリレーに子どもたちは憧れの気持ちをもっていました。
いざ、リレーをするぞ！！となりましたが、どうやってするんだろう？
昨年の年長さんどうやってたっけ…？とにかくやってみよう！！

すると・・・

いつまで走れば終わり？
最後に走るのは誰？
ゴールはどこ？

誰が同じチームだったかな？
誰にバトンを渡せばいいのか分からない！

困ったな～・・・。

チームで同じ色の帽子をかぶろうよ！

並ぶ場所に印をつけよう！

もう1回やってみよう！！

必要なものを自分たちで用意しよう！

作戦会議

速い遅い速い遅いの順番にしよう

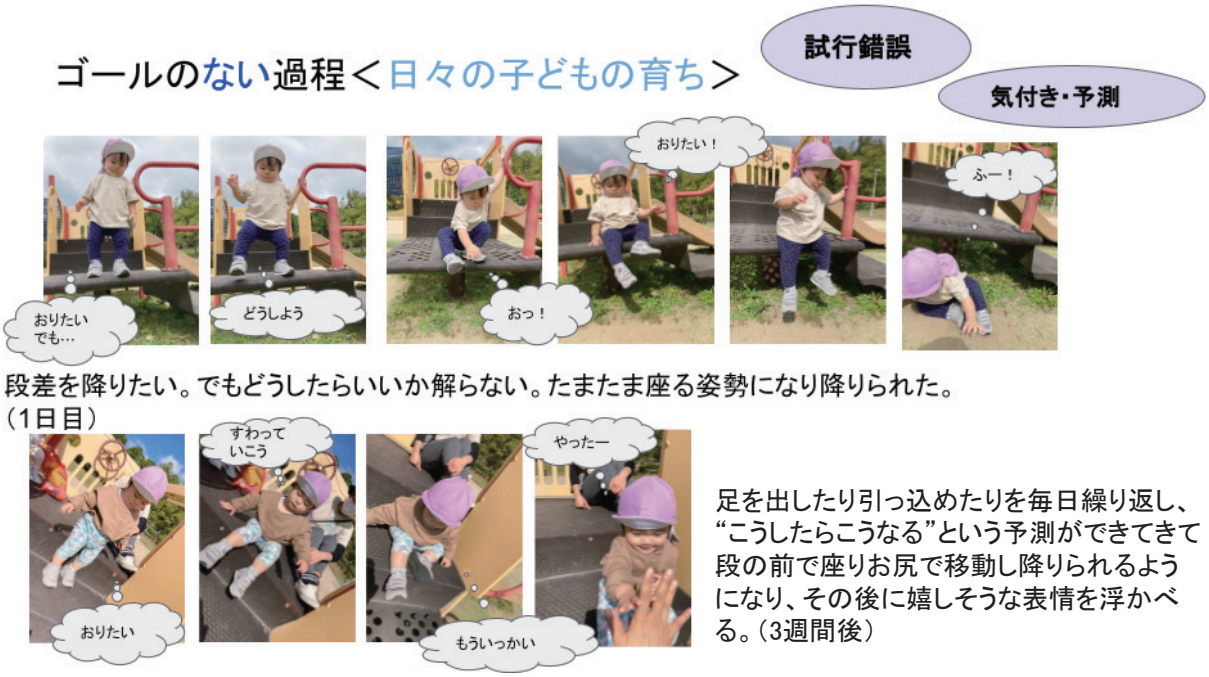
走るのが速いのは誰かな？

**はじめは、自分の思いを聞いて欲しい！が
強かった子どもたちが話し合いをくり返すうちに
友達の意見を聞く姿勢や受け入れる姿が出てくる
ようになりました。
チームの友達を思いやる気持ちが芽生え、困った時
には自分たちで考えて意見を出し合い実践する嬉し
さを感じていました。
リレーの勝ち負けの結果に注目が行きがちですが
運動会当日までに子どもたちがどんな風に取り組み
考えてきたのか、チームの友達との関係性の変化や
自分の役割に気付く姿など、勝ち負けの結果だけ
では分からない”過程”の中での成長を大切に
考えています。**

実践事例　3

ひじりとよかわ保育園

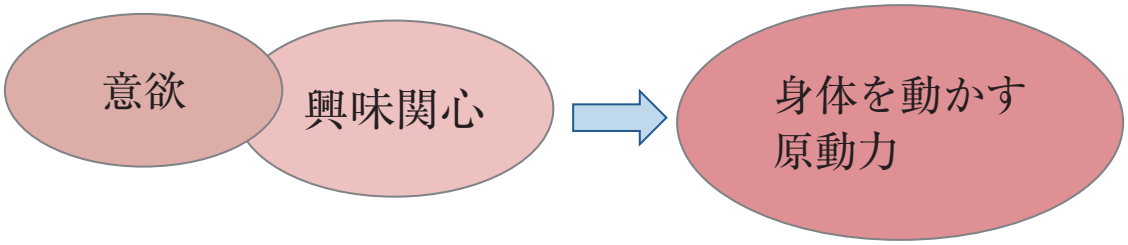
ゴールのない過程を日々の子どもの育ちとして、どのような姿を子どもの育ちの過程として捉えるか実際の子どもの姿を交えながら考えていきたいと思います。



～エピソード（１歳１ヶ月の子どもの姿）～

１人歩きができるようになったＳちゃん。自分の好きなように動けるのが楽しくて仕方ないのですが、遊具の段差を前にして足が止まりました。しばらくしてもまだこの段差の前にいてどうやら降りたいという思いが窺えました。足を出したり引っ込めたりを何度も繰り返し、その拍子にたまたま足が地面に近づき座る体勢になりました。この時には「おりられた」という嬉しそうな表情は見られず、この日以降この遊具や段差の前では必ず止まって降りたいとは思うのですが、たまたま降りることができただけなのでいつも立ち止まり足を出したりを繰り返していました。毎日の“たまたま”が結びついていき、“こうしたらいけるのかも”と自分で考えて降りられた時は“できた”と嬉しそうにする表情も見られ、このことから先を予測して“きっとこうできる”と考えた上での行動なのだと感じました。

やりたいという意欲が興味関心を生み、このような気づきに繋がるのだと考えます。こうした子どもの試行錯誤のようなものが育ちの過程と捉えて、子どもの中でどういうことに気付いたのかを言語化して保護者に伝えていきたいと考えています。



実践事例　4

大阪樟蔭女子大学附属幼稚園

遊びの中での「困ったな」

氷鬼を楽しんでいる子どもたちですが・・・。何度か遊んでいるうちに困ったことや、
気づいたことが出てくるようになりました。

気が付いたら
鬼が増えてるよ～

上手にタッチできなくて嫌や…。
もうやめようかな～

思い通りにタッチできなかったり、すぐに捕まってしまったりして、怒り出してしまう子や、勝手に鬼に代わっている子・・・。
なかなか上手く遊びが進みません。

遊びの振り返りをしよう！！

みんなの前で「困ったな」の気持ちを発表することで、あの時●●くんはこんな気持ちだったんだ！私も・僕も同じこと思ってた！と友達の気持ちに気づいたり、友達に知ってもらったりできる機会を設けます。そして、友達の「困ったな」の気持ちを聞いてみんなでどうすればいいかを考えます。

友達をタッチしたら交代して
逃げるんだよ

後ろから気づかれないように
近づけばいいんだよ！

遊びの中での見えにくい学びや成長

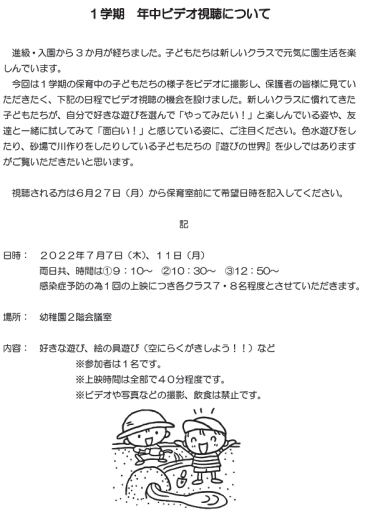
クラスだよりで、子どもたちの様子と成長の過程を感じてもらえるように保護者に向けて発信しました。１つの事例だけでなく、日々の様子を継続して何度も発信することや、その年齢の発達段階についても合わせて知らせることでより伝わりやすいのではないかと課題が残ります。

～鬼ごっこ～

「氷鬼するひと、この指と～まれ！」と毎日、子ども達の元気な声が響いています。３学期に入り、朝の集いの後にリーダーの子が先生となり、遊びを進める時間を設けていました。リーダー２ 人でルールを考えたり、鬼の決め方を考えたりして、クラスのみんなに伝えています。遊びが終わった後には、みんなで『遊びの振り返り』をします。上手くいったこと、困ったことをみんなで共有します。「早く走って、手を思いっきり伸ばしたらタッチできた！」「凍ってる子が鬼に守られていて助けるのが難しかった」とそれぞれに意見を出し合います。お楽しみ会で、話し合いを経験してから『遊びの振り返り』の時間では話しがどんどん深まっていき、友達が「沢山タッチされっちゃった～」と言うと「走りながら後ろもチェックするといいよ！」、「凍ってる子を助けにいったらタッチされちゃった」と言う子には「１人で行ったら捕まるから２人で行ってみたらいいんじゃない？」とアドバイスをしたり、それぞれに解決策を考えてあげる姿が見られるようになりました。『遊びの振り返り』の時間以外にも、「〇〇くん走るんめっちゃ早くてすごいよな～」「〇〇ちゃんにいっぱい助けてもらってん！よかった～」と友達の良いところを、ポツリポツリと呟く姿も見られ嬉しく感じています。一見「楽しい遊び」のように見えますが、この「楽しい遊び」の中で、色々なことを考え、感じ、学び、子ども達は成長しています。楽しい！からこそ夢中になって考えられる。そんな時間をこれからも大切にしていきます(*^-^*)♪

子どもたちの日常＜遊びの世界＞を保護者に伝える

1学期の子どもの姿をドキュメンテーションで伝えるとともに、ビデオ視聴の機会を設け動画で実際の子どもどうしのやり取りを見てもらいました。
事前にドキュメンテーションで子どもの姿の変化について知らせたり、手紙を配付してビデオ視聴で見てもらいたい姿について知らせたりもしました。



1学期　年中ビデオ視聴について

進級・入園から３か月が経ちました。子どもたちは新しいクラスで元気に園生活を楽しんでいます。
今回は１学期の保育中の子どもたちの様子をビデオに撮影し、保護者の皆様に見ていただきたく、下記の日程でビデオ視聴の機会を設けました。新しいクラスに慣れてきた子どもたちが、自分で好きな遊びを選んで「やってみたい！」と楽しんでいる姿や、友達と一緒に試してみて「面白い！」と感じている姿に、ご注目ください。色水遊びをしたり、砂場で川作りをしたりしている子どもたちの『遊びの世界』を少しではありますがご覧いただきたいと思います。

視聴される方は6月27日（月）から保育室前にて希望日時を記入してください。

記

日時：　2022年7月7日（木）、11日（月）
両日共、時間は①9：10～　②10：30～　③12：50～
感染症予防の為１回の上映につき各クラス７・８名程度とさせていただきます。

場所：　幼稚園２階会議室

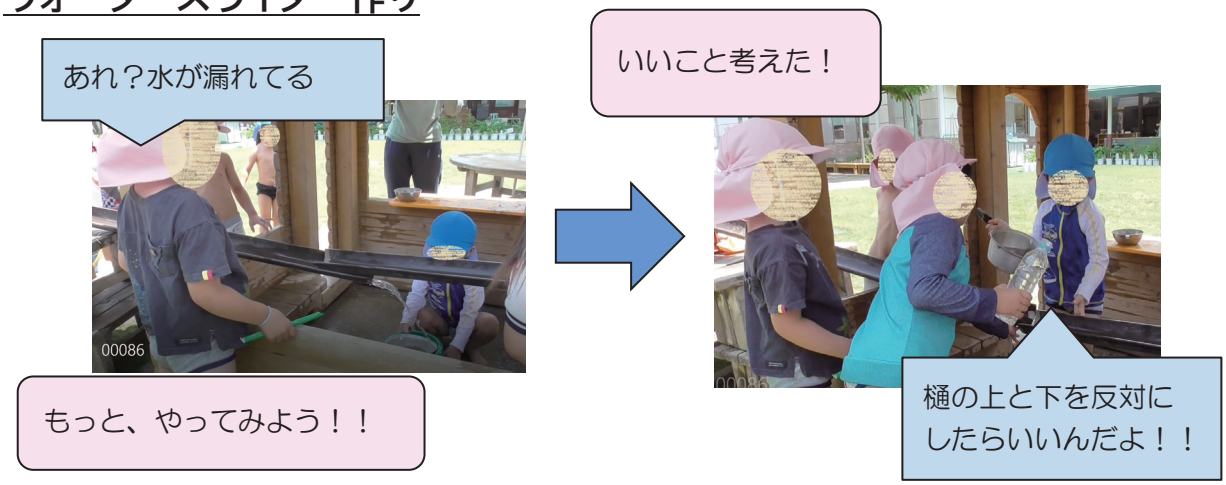
内容：　好きな遊び、絵の具遊び（空にらくがきしよう！！）など
※参加者は１名です。
※上映時間は全部で４０分程度です。
※ビデオや写真などの撮影、飲食は禁止です。

＜ビデオ視聴の内容を一部事例としてお伝えします＞

色水遊び

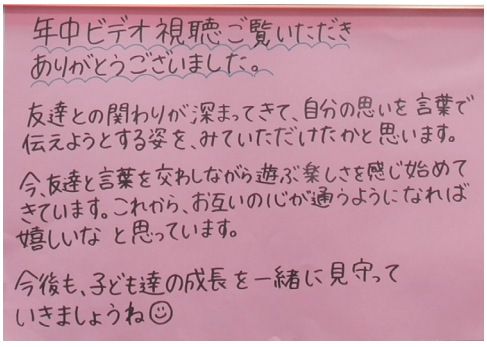
「水が欲しいな～」と呟く友達の声を聞いて、近くで水を持っていた子が「入れてあげるよ」と入れてあげていました。その後、別の子どもも友達のやり取りをみて「私も入れて」と声をかける姿が見られるようになりました。友達のしていることに興味をもったり、真似をしたりという姿が見られるようになり、少しずつ遊びの中で友達どうし”言葉”でのやり取りが増えてくるようになりました。

ウォータースライダー作り



必要なものを自分たちで考えて持ってきます。

最後に・・・


年中ビデオ視聴ご覧いただき
ありがとうございました。

友達との関わりが深まってきて、自分の思いを言葉で伝えようとする姿を、みていただけたかと思います。

今友達と言葉を交わしながら遊ぶ楽しさを感じ始めてきています。これから、お互いの心が通うようになればいいな と思っています。

今後も、子ども達の成長を一緒に見守っていきましょうね☺

子どもたちの「今」の姿から、「今後」どんな姿に成長していってほしいと願って保育しているかを保護者に伝えました。一見ただ楽しんでいるだけに見えますが、子どもたちは遊びの中でたくさん考えながら学んでいることを実際に子どもの生の声とともに届けたり、写真をつけて可視化したり見てほしいポイントと共に伝えることで保護者にも伝わりやすくなったと感じています。

実践事例　5　～可視化しづらい場面を可視化してみよう～　熊野田幼稚園

子どもどうしのけんかや、トラブル等の可視化しづらい場面を写真に撮って保護者に写真を見せながら、説明しました。

①大縄跳びをしている時に友達に順番を抜かされて、狭いところに入って落ち込んでいる場面です。いつもはとてもやんちゃで、手が出ることが多いのですが、今日は手が出ることはなく、このように我慢していました。

これまでは、対外的に手を出すということで感情を表現していましたが、内的に自分の中で感情をコントロールできるようになったと考えられるので、このエピソードから彼にどのような成長が考えられるでしょうか。

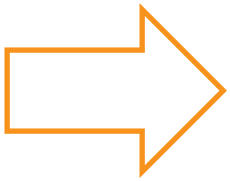
②眼鏡をかけている友達に対して「私も眼鏡を持っている」と言い、「○○ちゃんは眼鏡を持っていないでしょ！」と言い返し、「持ってるわ！」と強く言われた場面です。
一人は泣き出し、口論になっていたので保育者が仲裁に入りました。

実は眼鏡を持っているというのは事実ではなく、羨ましいという気持ちから出た嘘だったのですが、小さな嘘を友達からすぐに否定され、つい強い口調で反論してしまったのでしょう。

すぐに、自分の非を認め友達に対して謝罪ができたことは心の成長に繋がっているのではないでしょうか。

この２つのエピソードをそれぞれの、保護者に写真を見せながら説明しました。

保護者はどのような反応だったのか？



・そんなことがあったのですね。どうしてなんでしょう？
・そういうこと言うんですね。家で聞いておきます。

この取り組みを行ったことでの反省

○ただ、撮った写真を見せて、あったことを伝えるだけではなく、子どもたちがどうしてそのような行動をとったのか、この一つの出来事によりどのような成長がみられたのか等を考えることの大切さに気付いた。

○どのような経験も、長い人生における成長の過程であることを、常に意識して子どもたちの行動を見ていき、それを保護者に伝えていかないといけない。

今後の課題

○継続的に子どもたちの様々なエピソードを可視化し伝えていく。

○可視化する方法は、写真のみではなく動画も取り入れていく。

○保育者がどうして、子どもがこのような行動をとったのかを深く考える経験を増やしていく必要がある。

○子どもたちの成長の過程の捉え方を保育者間で認識を統一しておく。

朋来幼稚園

実践事例　6　～保護者がマイナスと捉えてしまう姿を可視化し伝えてみよう～

幼稚園に行きたくない・・・

原因は？

お友達と仲良く遊べていない

原因：（Aの保護者より）
・一緒に遊びたいのに仲間に入れてもらえない。
・髪型や持ち物を同じにしないと遊ばないと言われる。
→Aの保護者は、Aが幼稚園に行きたくないと言うのは珍しいので、不安に思っている。

だけどAは…

・友達B・Cのことは大好き。だから、一緒に遊びたいが、トラブルになった時Aは自分の気持ちを言葉で伝えられない。

また、Aは伝えたいこと（気持ち）が上手くまとまらない時、「もういい！」と怒ってその場からいなくなることがあるため、言えるようになればAの成長に繋がるのではないか？と考え、園でのAの様子を可視化し伝えることにしました。

・保護者から相談があった翌日

Aが園でB・Cと仲良く遊んでいる動画を観てもらった。
Aの保護者：BやCと仲良く遊んでいる動画を観て「楽しく遊べてますね！」と嬉しそう。
保育者：Aは、BやCのことが嫌いではない。それは、BやCも同じとAの保護者に伝える。

・数日後、Aが困っているところを写真に撮り、様子を伝えました。

・B・Cと遊びたいのに仲間に入れてもらえないとAが保育者に伝えることができ、その後、B・Cに一緒に遊びたいと言え、仲良く一緒に遊ぶことができました。

その様子を伝えると、

Aの保護者：Aが一緒に遊べたことを喜んでいた。

保育者：遊べたこと（結果）も良いが
Aが気持ちを言えたことがAの成長だと伝えた。

Aの保護者に可視化し、園での様子を伝えた結果

Aの保護者からは、

動画や写真でAの様子を見ることができて、Aの成長がより伝わった。
仕事が忙しく気づかなかったが、内面の成長が分かった。
家でもAが気持ちを伝えられたことを褒めたいと思う。

＜成果＞

・動画や写真と言葉で伝えることにより、保護者との共有がしやすく、また、子どもの見えにくい（内面の）育ちが伝わりやすかった。
・保護者とAの成長（育ち）を喜び合えた。

＜課題＞

・一人の子を追っていくことの難しさ。
（担任や友達が変わる）
・年少からの三年間、追えていたら見えにくい（内面の）育ちが更に伝わったのではないか。

実践事例　7

ひじりとよかわ保育園

子どもの姿を伝え続けることで保護者に変化は見られるのか？
～保護者が子どものマイナスと捉えがちな姿もどんどん伝えてみよう～

【子どもの様子を可視化して伝え保護者の気持ちが変化をするのか検証】

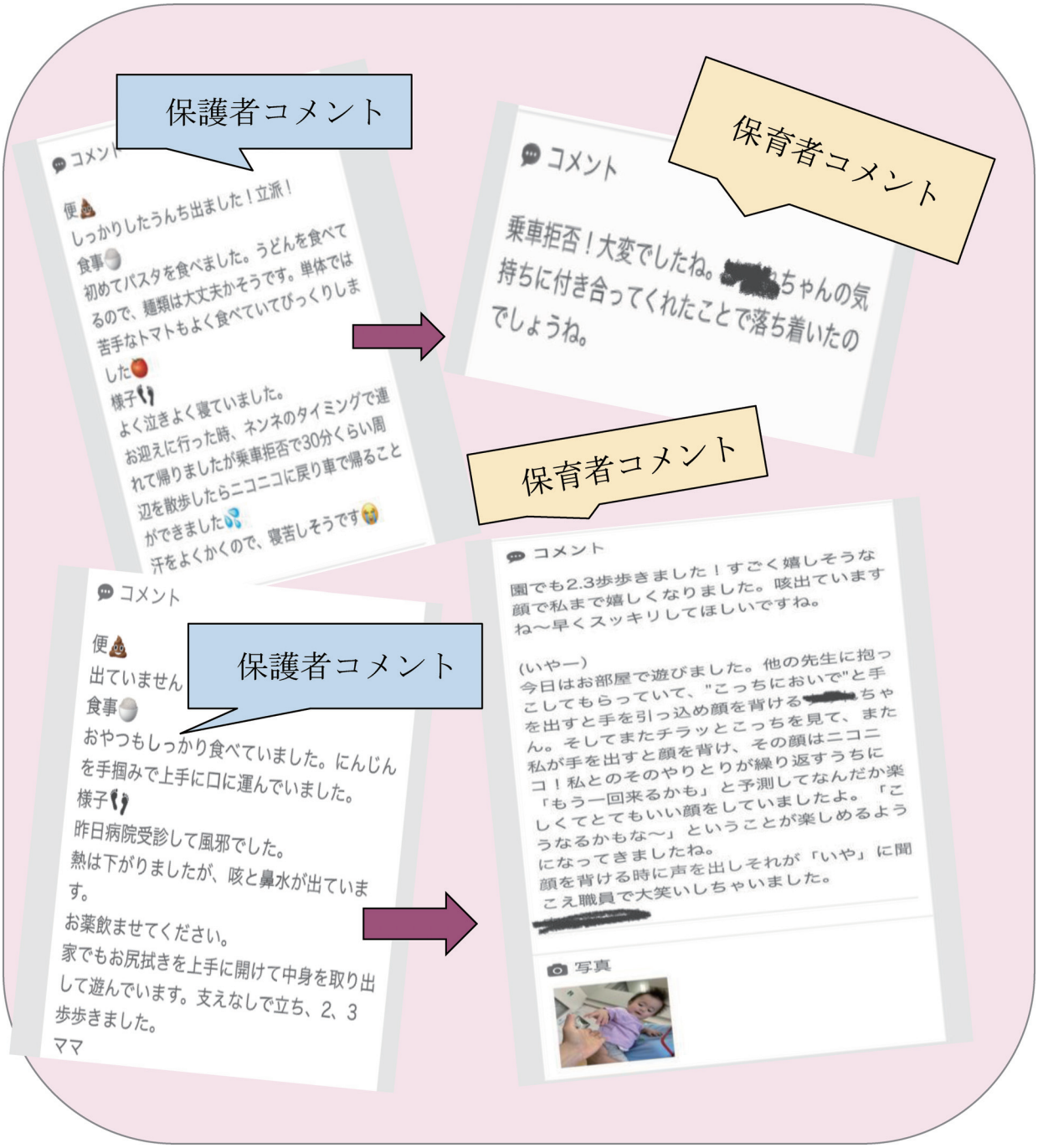
【方法】
- 日々の子どもの育ちをSNSを使って保護者に知らせる
- 保護者からもコメントができるようにする

【手段】
- 写真に子どもがこう思っているだろうという吹き出しをつける
- そこに保育者の子どもの見取りのコメントも載せる

【期間と内容】
- 2021年４月～2022年３月までの約１年間の記録の中から抜粋

毎日の子どもの様子を写真とコメントをつけ、SNSを利用して保護者に発信し、どういう変化がみられたのかを振り返ってみました。今回は一人の子どもを対象にその家族の変容を見ていこうと思います。

※１年の記録とありますが、以前より毎日、園の様子を写真をつけて連絡帳のやりとりをおこなっており、2021年７月からは手書きではなくSNSを使用するようになりました。従来だと貼っている写真も小さく何となく様子は伝わりますが、はっきりとした子どもの表情や動作などは見にくかったように思います。
SNSを使い配信するようになってからはスマホで撮った写真をそのまま連絡帳に貼り付けられるので大きくて見やすく、それも保護者の子どもの姿の見やすさに繋がったのではないかとも考えます。



０歳７ヶ月で入園したＳちゃんの様子をこのように毎日保護者と伝え合い、やりとりをするのですが、はじめは園での様子についてどう感じているかの反応はあまりみられませんでした。そこで意識的に保護者のコメントに対して返答をし、“こういうことが困っているんですよね”と共感して“園ではこういうふうにしていますよ”と伝えてみたり、目に見えて分かりやすい育ちについて一緒に喜んだりすることをしました。また、歩くようになっての軽い怪我に対して過敏に嫌がったり、家庭では囲いの中で怪我しないように過ごしているようでした。そこで、保護者が“危険だ”“ダメなこと”と思っているようなことも大切なことであることも発信していくようにしました。

繰り返していくことや子どもの見取りを丁寧に伝えることで見られた保護者の変化

①保護者からも園での様子についての返答が見られるようになったり園で伝えている姿が家庭でも見られタイムリーなやりとりで「あ～、この姿のことか」とより実感してもらいやすくなりました。

②保護者がマイナスと捉えているような姿も伝え、その伝え方も具体的にどういう姿なのかどんな育ちに繋がっていくのかを知らせ、保育者が子どもの姿を肯定的に捉えていくことで保護者の中でも変化がみられるようになってきました。

3）各園で様々な取り組みをした結果

＜成果＞

・可視化し発信を続けることで、結果だけでなく過程も見てもらえるようになってきた。（継続が大切である。）

・実際の姿を観てもらったことで、子どもの成長を伝えたときに保護者がすぐに想像でき、分かやすいとの声が聞かれた。

・毎日子どもの何気ない姿を伝えていく中で、保護者からのコメントで同じような姿の見取りをしている様子が見られた。（保護者の視点が変わった。）

・子ども理解に繋がり子どもの気持ちにより寄り添うことができた。

・保護者との信頼関係がより深まり、困り感を伝えてくれることも増えた。

・文章と共に載せることで子どもの表情や思いをより伝わりやすくできた。

・保護者と子どもの成長について喜び合えた。

＜課題＞

・保育者が良いと思った姿を保護者にも良いと受け止めてもらうことが難しい。
（我が子が下を向いているや良い顔をしていない等）

・日々の何気ない子どもの育ちを見取る視点を保育者が養うことが大切である。
（保育者間での過程を捉えた記録の共有）

・保護者の反応のリサーチをして、伝え方の工夫の仕方を考えていくことが必要である。

4）まとめ

どんな伝え方だと伝わるのか見えてきたこと……

・ポイントだけを伝えても見取りづらい為、日々継続的に伝えて（子どもの姿と見取り）いくことが大事

前はこんな姿だったけど、この後はこんな姿で、こう気持ちが変化したのかも…

⇒その都度、子どものその瞬間の姿を伝えられて新鮮なやりとりができる

・その姿の何を育ちと思って捉えてその事柄を伝えたいのか意図を保育者がはっきりもつ
※課題探究が大事

この姿のこんなところが嬉しかった！！
これってきっとこういうこと！

・保育者が見通しをすぐに（いつくらいにこうなる等）言わないことも大切
⇒長い目で見て保護者が育ちの結果を実感できるかも……

あ〜、先生が言ってたことってこういうことか！

・日々やりとりをして伝えていくことが大事だが、難しい場合はスライドなどでその年齢の姿ってどんな姿があって、どう育っていくかをを知らせる機会を設けると保護者も育ちの見通しが持ててわかりやすい
⇒園と家庭の両方で子どもの育ちを見取るきっかけになる

・写真の撮り方も本人だけや当事者間だけでなく、関わっている人や周りで見ている子どもも含めて撮るとより状況も伝わりやすく世界が広がる
※保護者の反応のリサーチをして、
伝え方の工夫の仕方を考えていくことが大事

保護者への伝え方は今後も課題にはなってくる

子どもの育ちの過程を伝えることは……

・大人が困るような子どもの姿にこそ育ちや学びがあるため、そこを伝えていくことが保護者の子ども理解のきっかけになる
例）喧嘩＝仲が悪いではなく喧嘩の中にたくさんの育ちがある

・マイナスと思われる姿を可視化し伝えていくことで別の伝わり方がでてくる
⇒結果を求めたい出来事だがその中ですぐに結果を求めないことに繋がる

・動画で伝えるか、写真で伝えるかそれぞれの良さがあるがどちらも何を伝えたいのかどこに注目してほしいのかを明確にし、伝えてから見てもらうことが大事

・育ちに見えにくい姿や子どもの育ちのプロセスは人生を通しての過程に繋がり、その経験をしていくことが大事なため子どもの日々の姿を見落とさないようにして発信していくことが大事

気を付けるポイントとして……

泣いている姿や怒っている姿ばかりを伝えても保護者の方は不安になることもあると思われるので、保護者との関係性や時期・状況なども鑑みて伝えていく必要もあるのではないかと感じました。

保育者間で「子どものこんな姿ってこんな育ちだよね」など子ども理解を共有していき保育の質向上に繋げていくことが保護者に育ちの過程を伝えていくことの今後の課題であるとも考えます。

第２章

子ども理解を深めるために、子どもの姿を教職員間で共有するための効果的な方法について

１）Episode１ ～子ども理解を職員間で共有したい～
２）Episode２ ～反省を受けて再度考えてみた～
３）Episode３ ～動画で実践を深める～
４）まとめ

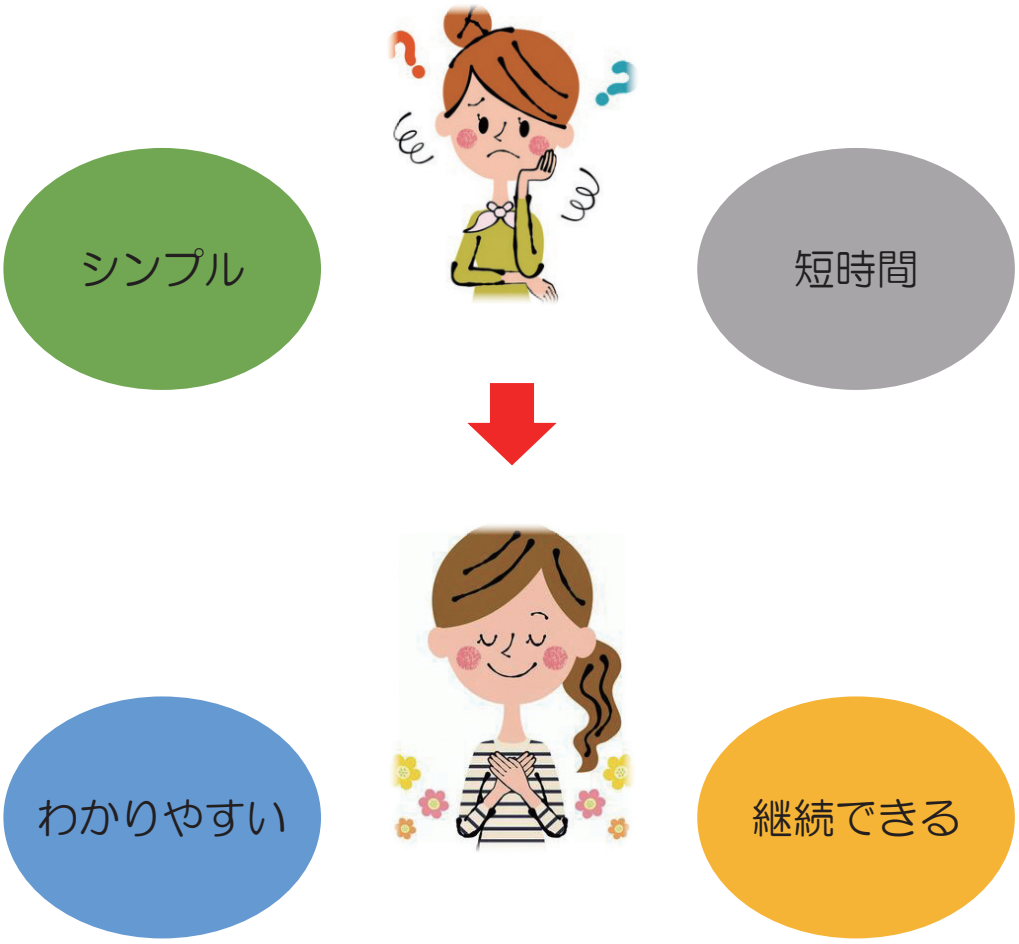
1）Episode 1　～子ども理解を職員間で共有したい～

きっかけ

・保育を展開していく上で『子ども理解』は欠かせないもの

・できる限り偏りがなく、多角的かつ正しくとらえたものが望ましい

・わかってはいるけど…どうやって共有したらいいのだろう？



①子どもの姿を共有するうえで、対象と目的を設定する

【対象】保育者

【目的】保育者間での子どもの育ちの共有（偏りのない子ども理解）

②作成する時のポイント（意識する点）

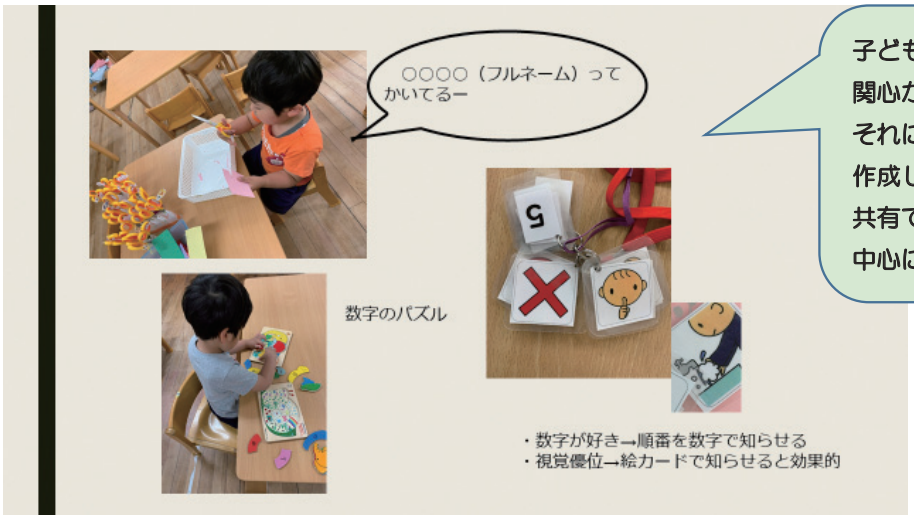
- 子ども理解がより深まること
- 継続できること

③共有方法

- 子どもの写真を見て、その子の思いや考えていることを共有する
- 特定の子の姿を継続的に追いかける

④各園での取り組み（抜粋）を紹介します

＜実践例１＞



＜実践例２＞

＜実践例３＞

⑤取り組んでみて

保育者全体の反応は良い！

でも…それって理解が深まったっていうこと…？

「子ども理解」がないと保育ができないのはわかっているんだけど…

なんだか続けていくのが難しいように感じる

【課題】

- その子への「子ども理解」がどれだけ深まったかをわかるようにする
- どの先生にも取り組みやすく継続できる共有の方法を考える

2）Episode2 ～反省を受けて再度考えてみた～

⑥新たに出た課題を整理して再検証

・より効果的な可視化ツールとは？

様々な形のものを作って比較する

・理解が深まったかどうかわかりにくい

継続的にアンケートをとる

・みんなにとって継続しやすい方法は？

共有範囲を変えてみる

⑦その後の取り組みを紹介します

見直しを踏まえ、改めて資料を作り保育者間で

共有してみました

検証パターンＡ

同じ場面の同じ静止画でもアングルによって違う？？

同じ場面でも撮り方によって見方が違う？

２つの写真を比べてみると？

アップで撮るのは？

- 子どもの表情を伝えたいとき
- 一人で集中して遊んでいる姿
- 細かくこだわっている部分や手元

全体で撮るのは？

- 周りの子に影響を受けて何かをしているとき
- 全体の状況を伝えたいとき

検証パターンＢ

写真もいいけど、
動画の方がいいんじゃない？

保育者間で子どもの姿を共有し、子どもを理解するために有効なのは
動画？静止画？同じ場面を比べてみると……

実践例

静止画を使って共有

鉄棒での前回りに挑戦！
ずっと「できない、できない」と言って諦めていたのに……

１度前回りができると

嬉しくって

みんなが歌ってくれたから

何度もやってみる

自信がついた！！

動画を使って共有

この一連の流れが説明いらずで共有できる

２つを比べてみると？

静止画

メリット

- 印刷して保存がしやすい
- 振り返りの際に短時間でまとめて見ることができる
- 着目したいポイントがわかりやすい
- 後から文字で説明が入れられる
- 情報量が少ない分子どもの姿を想像しながら見ることができる

デメリット

- 周囲の状況がわかりにくい
- 伝えたい瞬間を撮り逃す
- 保育者の働き掛けが見えてこない
- 文字や説明がないと伝わりにくい

動画

メリット

- 状況がわかりやすく共有しやすい
- 声が入っているので文字を入れなくても状況がわかる
- 表情の撮り逃しがない
- 保育者の言葉がけや働き掛けなどの背景もわかりやすい

デメリット

- 音が入っているので、見る場所や状況が限られる
- 印刷しての保存に適さない
- データの保存がしにくい
- 着目するポイントがわかりにくい（情報量が多い）

結果……

・子どもの姿を伝えるときに背景や働き掛けが影響する時は動画の方が有効的

・個人の『できた』という経験に着目するなど、個人の育ちを共有したい時は、情報量の少ない静止画が有効的

・静止画と動画を比較した場合、子ども理解という点においては動画の方がメリット大きいことがわかった。

・目的に応じて動画と静止画を使い分けることが望ましいが、スマートホンやタブレット類を使用するのであれば、動画で撮影しながら必要に応じてシャッターを押すことで、静止画としても残せるという特質上、基本的に動画での記録を中心に実践することが効率的かつ効果的と考える。

検証パターンＣ

記録を共有した先生たちに聞いてみた！

文字(エピソード記録)が多いパターン

担任の言葉と共に聞くと
状況や思いが伝わってきやすい

読みづらい

写真が多く、文字が少ないパターン

見やすく興味が湧く

情報が少なく子どもの
気持ちの動きは捉えづらい

動画を使ったパターン

わかりやすい

撮る側の難しさや見る側の時間
負担を考えると、継続が難しい

■環境構成を通して、子どもが変わっていく様子を伝える時は、
写真の多い記録が有効。

■関わりを通して、変化が大きい時は、文章が多い記録の方が有効。

先生たちへのアンケートから

～共有してみて「子ども理解」が深まりましたか？～

発表する側

- まとめることで、自分自身の振り返りになり、自分の関わり方や環境構成を考えるきっかけになる
- 他の先生の意見を聞くことで、見えていない本児の姿を知ったり、自分とは違う関わり方を知ることができる

聞く側

- 日頃あまり関わりのない子でも、その子の内面を知ることができ、理解して関わることができる
- 自分の保育の中でも、関わり方を参考にできる
- 人数は学年（３．４名）が共有しやすい。

総括(現時点での)

～1 人の子の姿を追いかけてみて～

現状で得られている　成果・課題

感じたこと･気付き

【記録】

●具体的な引き継ぎに活用できる。

➡ 記録の使い道の幅が広がる

●指導要録を書くときに内容が充実、内容に深みが出てくる。

【写真・動画など】

●同じ場面でも撮り方が様々(近くで撮る、遠くから撮る)。

●同じ写真でも先生によって見方が違う。

⬇

1 人で写っている写真を見てどう感じるか

・寂しそう

・1 人でも楽しめる

→実はこういう場面でした

様々な感じ方があるのでは？

成果

●対象児への援助の在り方について具体的な意見が多く出るようになった。

●対象児に対して担任以外の先生からの声掛けが日常的に増えた。

→次の共有時に、よりリアルな共有ができる。

●対象児を中心に保育室の在り方を考えるようになり、環境構成に対しても今まで以上に深く考えられるようになった。

●共有資料の効果が見えてきたので、共有したい内容に応じて資料を作れるようになった。

●共有範囲は、まずは少人数の方が深まりやすい。

●一人の子の姿を追いかける方がその子の様子の前後がわかり、より理解が深まるという実感。

課題・困ったこと

●対象児以外で他にも複数人見たい子が出てきたら、誰を優先したらいいか迷う。

●より継続しやすくするにはどうすればいいか。

★一人の子にこだわりすぎることなく、必要や目的に応じて対象者やその場面を選んでいくこととする。

★子どもの姿を共有するうえで、まずは子どものリアルな姿をとらえて記録しておく必要があり、より効果的かつ継続しやすい方法を考えた結果、動画での記録方法に注目して実践を深めてみることとする。

3）Episode３ ～動画で実践を深める～

実践：同じ場面を静止画と動画で比較検証してみた

静止画を使って共有

Q：これは、青虫の観察をしている場面です。どんな会話が想像できますか？

動画を使って共有

Q：では、動画ではどうでしょう？

子どもたちの会話から、活動内容や子どもたちの思いがわかる。時に、予想していなかった展開もあるため、保育者の想像だけでは、新たな保育環境は生まれなかったかもしれない。

4）まとめ

子ども理解を深めるために、1人の子を追いかけてみて。。。

子どもの姿を職員間で共有するために
何を使って記録を残していくか‥
今までの取り組みの中で気づいたことがありました。

どういう記録がより効果的か？

どうやって
共有する？

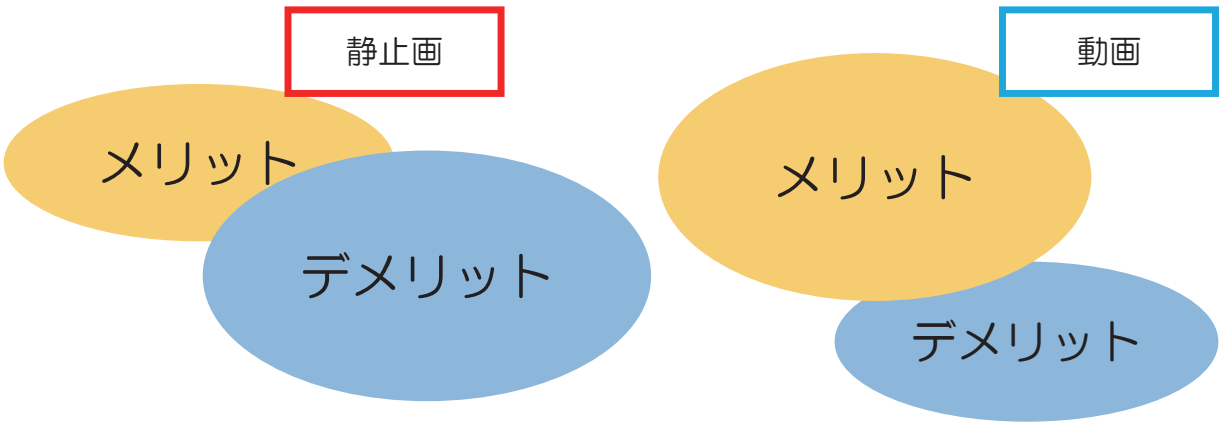
取り組みやすく、継
続しやすい方法は？

シンプルで分
かりやすいも
のがいい。

写真もいいけど、動画もいい！

目的・明らかにしたいことは何か？
多様な撮り方で何が違うのか？

●静止画と動画を比較してみて。。。



静止画と動画を比較した場合、子ども理解という点においては
動画の方がメリットが大きいことわかりました。

子どもの育ちにも色々な部分があるので、
育とうとしているところを伝えていければ……

《おまけ》ツール別の効果

【デジタルカメラ】

メリット　：壊れにくい
　　物によっては安価に手に入れられる
デメリット：安価なものはシャッタースピードが遅い
　　撮ったものを転用する際に PC が必要

【スマートホン】

メリット　：シャッタースピードが速い
　　使い慣れている人が多い
　　アプリでドキュメンテーションが簡単に作れる
デメリット：高価になりがち
　　画面が割れやすい

【タブレット】

メリット　：画面が大きいため確認がしやすい
　　アプリで編集がしやすい
デメリット：高価になりがち
　　持ち運びしにくい
　　画面が割れやすい（デリケート）

第３章

「つい語りたくなる」保育の可視化とは
～アンケート・実践を通して見えてきたこと～

１）研究テーマ①
「保護者に向けたドキュメンテーション」について
～アンケート結果から見えてきたこと～

２）研究テーマ②
『つい語りたくなる』記録とは

３）全体のまとめ

1）研究テーマ①「保護者に向けたドキュメンテーション」について ～アンケート結果から見えてきたこと～

第３グループでは、初めに各園のドキュメンテーションの事例を持ち寄り、共有し、話し合いをしました。その中で見えてきた各園の共通点・相違点・関心を整理しました。

1．共通点：５園とも保護者に向けたドキュメンテーションを行なっている。そのねらいは子どもの育ちを保護者に共有すること。

2．相違点：配信・作成の方法はそれぞれ違う。各園の環境や考え方によって違う。

3．関　心：保護者に向けたドキュメンテーションを作成する上で、保育者自身も子どもの育ちを捉え直す（子ども理解）ということがあるのではないか。

グループのテーマとして、・配信・作成方法の視点（相違点）・育ちの共有の視点（共通点）・子ども理解の視点（関心）の３つの視点で深掘りしていくことに決定し、各園の先生方にアンケートを実施することとしました。以下の章では、各ステップを時系列で詳しく記述していきます。

①－１　各園のドキュメンテーションの整理

保育の可視化の種類・発信方法

まずはプロジェクトグループの各園で行っている、保育の可視化の種類やツールを出し合って整理をしてみることにしました。その中で感じたことは、各園で共通してクラスだよりを出していても、書いてある内容の違い（文章・写真・吹き出し・10の姿のまとめ等）や発信方法も様々であり、各園が試行錯誤しながら可視化の実践を行っているということでした。このように他園で実践している事例を知る機会があることで、改めて自園での可視化の種類や内容の見直しや工夫をすることができ、よりよい保育の可視化へと繋がっていくと思います。

◇クラスだより◇

（幼保連携型認定こども園光の園幼稚園）

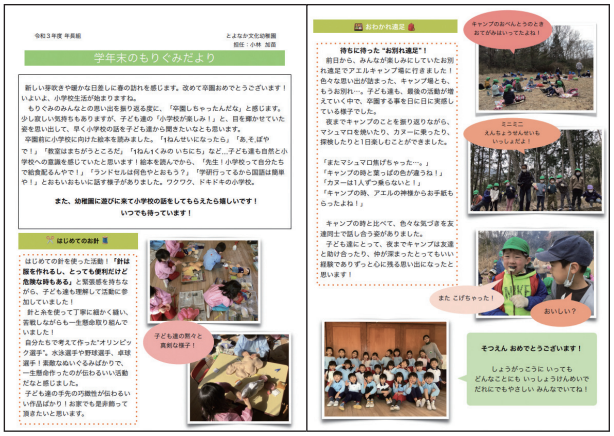
発信方法：ホームページ

発信頻度：週１回（毎週金曜日）

内　　容：写真・吹き出し
　　10の姿の図

・クラスでの取り組みの様子をタイムリーに発信

・遊びの広がり、子どもの様子、10の姿等も含め、週案としても活用


学年末のもりぐみだより

（とよなか文化幼稚園）

発信方法：PDF

発信頻度：月１回

内　　容：写真・吹き出し
　　文章

・クラスの取り組みや行事等を通しての子どもの姿や育ちを発信

◇ポートフォリオ◇

ひじりっこポートフォリオ

（認定こども園せんりひじり幼稚園）

発信方法：紙媒体でファイリング

発信頻度：月１回（月末持ち帰り）

内　　容：写真・吹き出し・文章

・その月の個々の姿と育ちを発信

・保護者からのコメント欄をつけて、持ち帰った際にコメントを記入してもらい、後日提出してもらう

→家庭での様子や育ちを感じた感想等を共有できる場となっている

◇ドキュメンテーション◇

もも組　成長展だより　令和4年2月10日

（認定こども園高槻双葉幼稚園）

発信方法：アプリ

発信頻度：プロジェクト保育（行事）の際にクラスごとに発信
　　頻度は取り組みに応じて

内　　容：写真・吹き出し・文章

・プロジェクト保育の過程を通してのクラスの子どもの姿と育ちを共有

→行事の場合、当日までに知らせることで取り組みの過程の大切さを伝え、家庭と共有することができる

◇ホームページ・アプリ機能で子どもの様子を発信◇

（白鳩羽曳野幼稚園）

【ホームページ】

発信頻度：週１回

内　　容：写真・文章

・行事の様子や日々の出来事を発信

（認定こども園せんりひじり幼稚園）

【アプリ機能】

発信頻度：週１～２回

内　　容：写真・文章

・保護者からコメント欄やいいねの機能があり反応がうかがえる

①－２　アンケートの実施

各園の事例整理を通じて、グループ３の共通点・相違点・関心が見えてきました。

・共通点：５園とも「保護者に向けたドキュメンテーション」を行なっている。そのねらいは「子どもの育ちを保護者に共有する」こと。
・相違点：配信・作成の方法はそれぞれ違う。各園の環境や考え方によって違う。
・関　心：保護者に向けたドキュメンテーションを作成する上で、保育者自身も子どもの育ちを捉え直す（＝子ども理解が深まる）ということがあるのではないか。

関心については、話し合いの中で「子ども理解」というキーワードが出ました。グループでは、「子ども理解」を「子どもと関わりながら、その子どもの発達、性格、感情だけでなく、人間関係や環境も視野に入れて総合的に理解すること。保育行為の中で積み上げられる『その子』に関する情報を、これまでの保育者自身の中での理解と照らし合わせ、修正し、新しい理解を構成していくもので、それは常に暫定的で、関わりを通して再構成し続けるもの。」という定義を共有しました。

定義の中に「修正し、新しい理解を構成していくもので、それは常に暫定的で、関わりを通して再構成し続けるもの。」とあることからも、日々の保育実践、特に先生たちにとっては振り返りの意味も含んだドキュメンテーションの実践が「保育者の子ども理解」に影響しているのではないか、ということに関心が生じました。

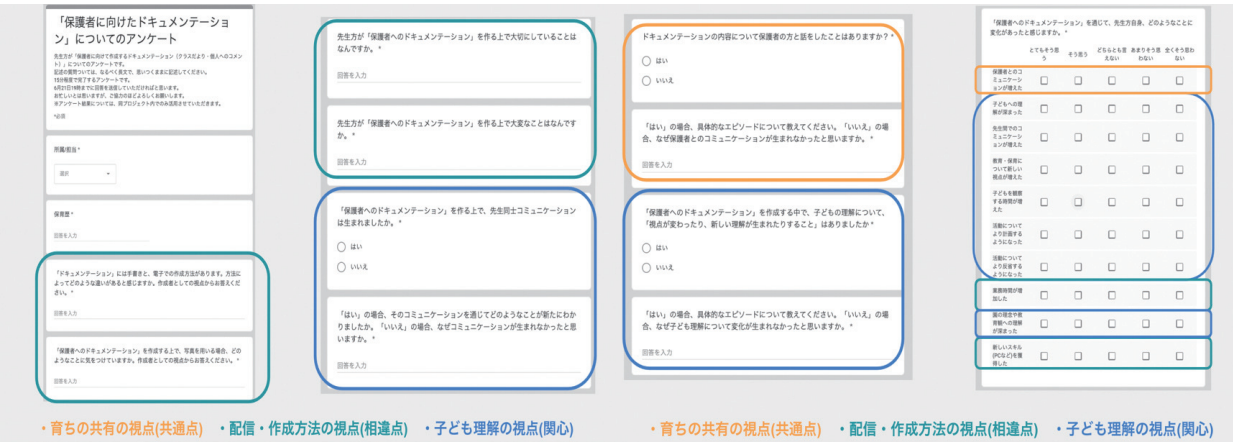
先に挙げた共通点・相違点・関心をそれぞれ深掘りするため、実際にドキュメンテーションを作成している先生方に、アンケートを実施しました。

アンケートの概要

グループ３に所属する５園＋姉妹園の計６園にアンケートの協力を依頼しました。アンケートはGoogleフォームを用い、有効回答数は77件ありました。

アンケート内容

アンケートの内容は以下の通りです。共通点・相違点・関心のそれぞれの内容がカバーされるように質問を構成しました。



①－３　配信・作成方法の視点（相違点）

この章では先に挙げたグループ３の共通点・相違点・関心のうち、特に相違点「配信・作成方法の視点」について掘り下げていきたいと思います。各園の事例を整理する中で、手書きで行っている園とデジタルで行っている園があることがわかりました。アンケートを実施し、メリットとデメリットを整理したのが下記の表です。

	メリット	デメリット
手書き	・誰でも書くことができる ・温かみ・個性が感じられる ・保育者の熱量が伝わる ・レイアウトを細かく構成しやすい	・写真の印刷の手間 ・フォーマットがない為、レイアウトが細かくなる ・作成・修正に時間がかかる ・保管がしにくい
電子	・作成時間の軽減 ・紙の削減 ・タイムリーに発信できる ・スマホで気軽に見られる ・読みやすく、データの保管がしやすい	・保育者の得意不得意がある ・電子機器がある環境でしか使えない ・セキュリティ面に配慮が必要

＜レイアウト＞
ひながたを残しておき、同じレイアウト(デザイン)のものを使用する

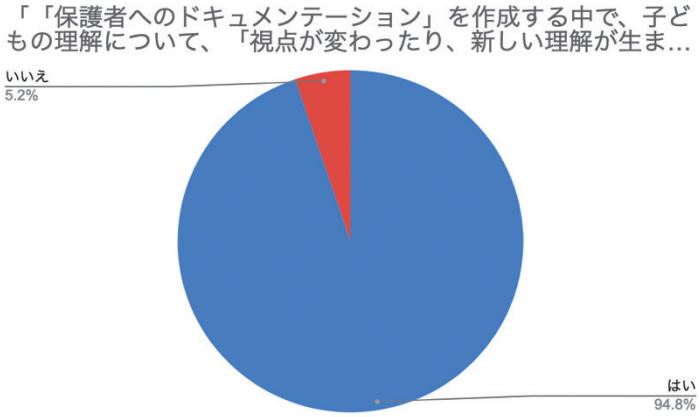
＜内容(文章)＞
他の先生とドキュメンテーションを共有する場を設け、学びあう
→他クラスの様子や活動を知るきっかけにもなる！

＜写真選び＞
・他の先生の協力も得る(写真を通しての育ちの共有)
・「つい語りたくなる写真」を撮る意識

①－４　子ども理解の視点（関心）

この章では先に挙げたグループ３の共通点・相違点・関心のうち、特に関心「ドキュメンテーションと子ども理解」について掘り下げていきたいと思います。

Q「保護者へのドキュメンテーション」を作成する中で、子どもの理解について、「視点が変わったり、新しい理解が生まれたりすること」はありましたか？



この項目では94.8%の先生方が「はい」と答えました。
この質問に対する自由記述の欄では、下記の回答がありました。

「子どもをより観察」

・**きっと、たぶん で見てしまっていた姿が、おたよりを作るにあたって確実な情報の中で作成することで子どもたちと会話が増え、新しい姿や遊びの事実を見る**ようになった

・どんなことに興味を持ってどんな遊びが好きなのか、これをしたい!! じゃあ何をするべきなのかと**子どもたちが考えていることなどを理解するようになりました**。

・ひとつひとつの活動について、**子どもと同じ立場に立って活動したり、子どもどうしの会話に耳を傾けることが増えた**。そうすることでより活動の雰囲気を保護者の方にも伝えられると思い意図的にしていたが、その結果**クラスの子どもの知らなかった部分に気づくきっかけになったり、子どもたちのいろんな小さな発見に一緒に共感できるようになった**。

・その子どもと関わっていた時に思っていたその子の育ちとは別に、ドキュメンテーションを書いている中で**「こんなところも育っていたのか！」とまた違う視点からの育ちに気づくことがありました**。

「写真」

・**写真を撮ろうと意識していると自然と子どもの目線を意識して関わるようになった**。そのため、夢中になるタイミングや、遊びに向き合う姿が目から感じられるようになってきた。

・**写真を見返す時に、どの子がどんな活動をよくしていて、どの子があまり活動に参加してない、などが客観的**に分かった。

アンケートの記述からも「保護者へのドキュメンテーション」を作るにあたって、保育者が

・子どもの立場に立って、子どもに共感し、その姿を正確に理解しようという態度

・子どもの会話をより聞くようになったこと

が読み取れます。

またその場面のイメージを伝えるために欠かせない写真については、写真を撮るという行為が、

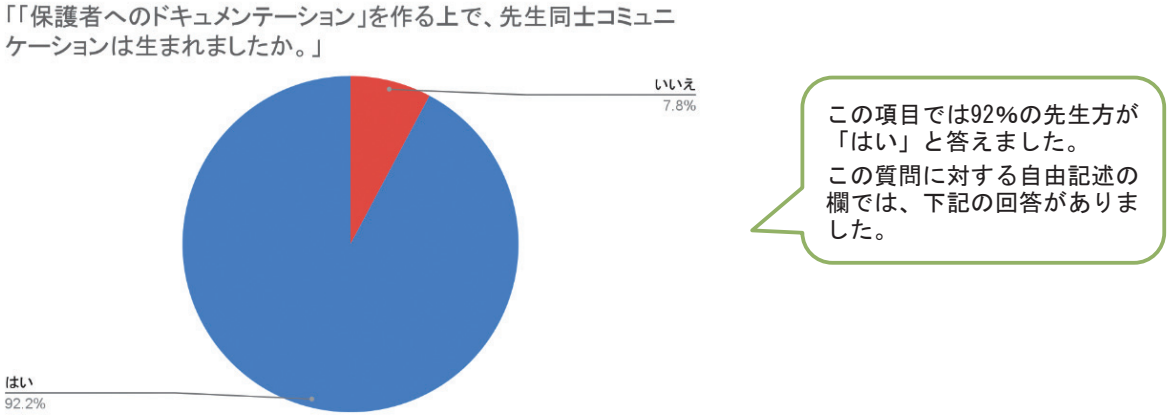
・日々の保育実践を一歩引いた視点からメタに観察することにつながり、

・その場面を振り返るきっかけになっている

ことが読み取れます。

一つに「保護者へのドキュメンテーション」で子どもの育ち・姿を保護者に伝えようと考えて作成する中にも、保育者自身の新たな発見・変化があるようです。

Q「保護者へのドキュメンテーション」を作る上で、先生同士コミュニケーションは生まれましたか。



「保育者間の理解と育成」

・その**先生の得意な分野が見えてくるので、そこをきっかけに話をしたり**、似たような機会があった時に、任せるという選択をすることができるようになります。

・同じ学年の職員間とは、「今週何枚くらい載せる？どんな活動載せる？」とフィードバックも交えながら話す機会が増え、**フィードバックする際に新任の子へ不安や大変だと思っていることをフラットに聞く機会にもつながった**。

「園としての共通理解」

・学年で行事に向けてのドキュメンテーションを作る時は、**行事について改めて話す中で担任の想いやねらいが少しずつずれていることに気づくきっかけ**になりました。

・**他クラスの子どもの姿や保育を知るきっかけ**になっている

「子どもの育ちの発見」

・ドキュメンテーションを基にクラスの話ができることで、**他の先生からクラスの様子や育ちについてお話してもらうこともでき、自分が気づいていない部分にも目を向けることができるようになっている**と思います。

・ドキュメンテーションの見合いをすると、同じような場面でも、育ちとして捉えてる部分が違うことがあります。その違いを認め合い、**意見交換をすると、新たな子どもの育ちが見えてくることもあり**ます。

ドキュメンテーションを作る過程を通じて、保育者間のコミュニケーションがより生じることが、グラフからも読み取れます。

また記述の回答からは、ドキュメンテーションを通じた保育者間のコミュニケーションを通じて、

・保育者がお互いのことをよく理解するきっかけ

・園として行っている行事や、普段はなかなか知るきっかけがない他のクラスの活動について知るきっかけ

・自分では気づかない子どもの育ちを発見するきっかけ

になっていることが読み取れます。

「保護者に向けてドキュメンテーションを作る」ということだけをパッと聞かされると、「先生たちの事務の仕事が増えてしまう」と考えてしまいがちですが、ドキュメンテーションを作る過程が、「保育者の子ども理解がより深くなる」ことや、それを通じた「保育者間のコミュニケーションが生じる」ことなど、園にとってさまざまな良い影響が生まれるきっかけになるのではないでしょうか。

実践実例①　認定こども園高槻双葉幼稚園

～手書きから電子にチャレンジ！！～

本園では子どもたちの育ちや、育とうとしている過程を伝えるということを意識して保育の可視化に取り組んでいますが、ドキュメンテーションを書くことに時間がかかり定期的に発信することが課題でした。プロジェクトで他園の様々な取り組みを聞く中で、様々な発信・作成の方法があると学び、自園に取り入れられることを考え、新たな発信方法に取り組んでみました。

☆これまでの発信方法

・毎月１回、園だよりや学年だよりなどで子どもたちの育ちを紙で配付

・大きな行事のみ、クラスだよりで発信

→各クラスそれぞれのレイアウトで手書きのドキュメンテーション

☆プロジェクト参加園のお話を聞いて……。

保護者に育ちを伝える方法において、各園の発信・作成方法の違いを知り、自園で、保育者自身も子どもたちの育ちを捉え直し、“つい語りたくなるようなドキュメンテーション”をつくりたいと思い、研究してきました。

プロジェクトに参加するまでは、電子での作成は手書きより温かさがないのではないか、パソコンが全員分ないので一斉に作成の時間がとれないなど抵抗を感じていましたが、プロジェクトで学ぶ中で、作成の手間や仕事量の削減、紙の削減など電子の良さを知り電子に挑戦することにしました。

☆実際にどうやって取り組んだらいいのだろう……。

各クラス担任にタブレットを準備し、各自の勤務時間内で子どもたちの育ちをタイムリーに発信できるように、学年内で保護者に伝えたいねらいを共有する時間を確保するなど、様々な工夫をしました。

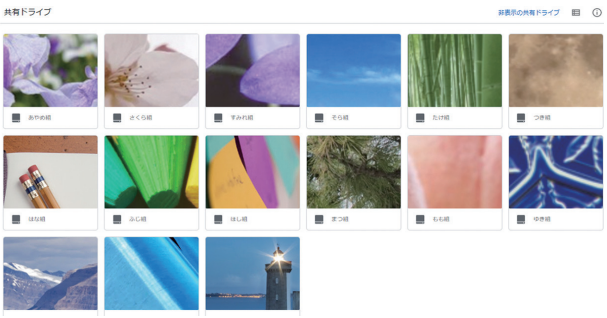
【色々な発信の工夫】

◎新たな取り組み

今まで書いていた手書きのクラスだより

電子機器を使ったクラスだより

①電子機器の導入・データを共有するシステムの導入



自園では、共有のパソコン数台と各学年に１台ずつパソコンがありますが、全員が勤務時間内でドキュメンテーションを作成することが難しい状況でした。そこでタブレットを各クラス担任に準備しました。全員がタブレットでドキュメンテーションを作成することができるようになり電子機器が不足しているという点は改善できました。

ICTシステムを使った専用アプリを使って配信することで、今までは自分の子どもの学年しか配付していなかったドキュメンテーションを、カラーで全学年の保護者が携帯で気軽に見ることができるようになりました。

②学年内での相談・職員同士のドキュメンテーションの共有

職員間では今までは他学年のドキュメンテーションを見る時間の確保が難しかったり、回覧していると時間がかかってしまっていましたが、①のデータを共有するシステムを使うことで、各クラス担任が自分のタブレットで各自の保育後の時間に他の先生のドキュメンテーションをみることができ、職員間の共有がしやすくなりました。

③レイアウトの統一

「書きたい」「伝えたい」というエピソードがたくさんあり、レイアウトが個人にまかされると作成にかかる時間差が大きかったため、学年内で書く内容を相談して決め、テンプレートを作成しました。勤務時間内に職員どうしで共有しあいながら、作成することができるようになり、それぞれがレイアウトを考える時間を省くことができました。

④ドキュメンテーションについての園内研修

電子機器を導入し、時間の削減が解決できると思いましたが、職員間でも作成の時間差が大きいことが新たな課題にあがり、どうしたら勤務時間内に仕事を終えられるのか考えました。その課題点に対して取り組んだことは、可視化についての園内研修や他園や他職員のドキュメンテーションを見る機会を設けるというものです。この研修をすることで、子どもたちの育ちをどのように

伝えるのかを職員間で相談することができコツや育ちを踏まえての書き方などがわかるようになり、ドキュメンテーションを作成しやすくなりました。

【課題点に対しての解決策】

（課題点）	（改善点）
☆パソコンの得意不得意により作成時間の差が大きい	➡職員どうしで共有しながら、一緒に作る
☆レイアウトを考えるのに時間がかかる	➡レイアウトを統一
☆育ちを簡潔にまとめることに時間がかかる	➡学年内で何を伝えるのか相談する
☆電子機器の不足（パソコンが一人一台ない）	➡タブレットの支給

【良かった点】

・気軽に書くことができるので、子どもの活動をタイムリーに発信することができた。
・職員間での会話が増え、子どもたちの育ちを、学年を超えて共有しやすくなった。
・保護者とのコミュニケーションが増えた。
・電子にすることにより、印刷の手間やコストを削減することができた。

【課題点】

保護者の中でまだ配信が定着していない人がいる。「見てみよう！」と思ったり、家庭で子どもとの会話が増えるようなドキュメンテーションを作っていきたい。

実践実例②　認定こども園せんりひじり幼稚園

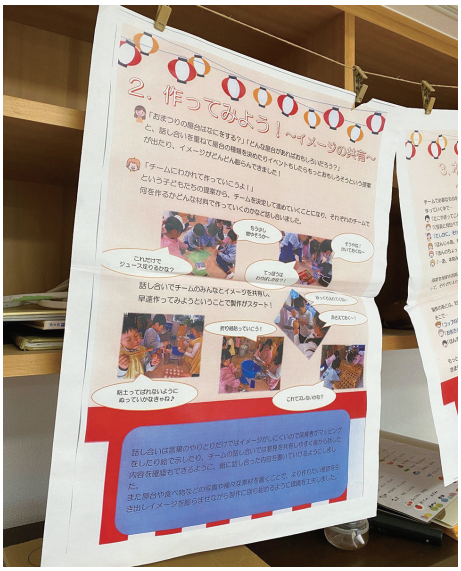
～よりよい発信方法を見つけよう！～

自園では紙媒体だけでなく電子媒体を取り入れながら発信方法を工夫し、日々実践を行っています。

しかし様々な発信方法があるゆえに、新たに悩みに直面することがありました。行事の時期には、アプリ機能でクラスの様子を発信する内容・クラスだよりの内容・クラス懇談会の内容等、それぞれの発信の中で伝えたい内容が重複してきてしまうという悩みが出てきました。また、行事の取り組みの中でドキュメンテーションをタイムリーに発信していきたいが、どのような方法が読みやすい形で保護者に伝わりやすく理解してもらえるのかという悩みも出てきました。

プロジェクト参加園で実践を出し合った上でドキュメンテーションを電子媒体でまとめる際の方法の詳細や配信頻度など、様々な情報を出し合った上で、改めて自園の取り組んでいる発信方法のねらいやメリット・デメリットを整理してみることにしました。年長組のお店屋さんごっこのプロジェクトが控えていた時期だったため、お店屋さんごっこのドキュメンテーションのあり方や配信方法を考え直しました。

○従来のお店屋さんごっこのドキュメンテーション（年長組）



【発信方法・形式・内容】
・紙媒体→完成した際に、保育室に随時掲示
・全てのドキュメンテーションが完成後、印刷をして配信
・写真・吹き出し・文章で子どもの姿・育ち・保育者の関わり等を記入

【発信頻度】
・プロジェクト保育の期間に４、５枚のドキュメンテーションを作成

これまで従来通りの発信の仕方を毎年違和感なく取り組んできましたが、コロナ禍ということもあり今までの発信の仕方でのデメリットが浮き彫りとなってきました。

【デメリット】
・全員が園迎えでないため、随時貼り出した際に、タイムリーに保護者の方に見てもらえない
→コロナ禍で園迎えでも園の中まで入れない状況のため、見てもらう機会が減少
・紙媒体での配付だと取り組みの過程の流れがわかりやすく、記録として残してもらえるが、完成してからの配付のためタイムリーには手元にはなく見てもらえない

☆デメリットより改善点を見出してみると……

お店屋さんごっこの過程や育ちをタイムリーに発信できないため、保護者との共有も時差がついてしまうことが明らかになってきました。そして担任間でも、タイムリーに共有したい気持ちが強くあることを確認しあった上で、ドキュメンテーションのねらいを”取り組みの過程や育ちを、タイムリーに保護者の方と共有するもの”と改めて意識づけを行い、新たな発信方法に挑戦しました。

【新たな発信方法】

○アプリ機能を使ってドキュメンテーションを配信！

【発信方法・形式・内容】
・アプリ機能を活用し、クラスフォト機能でドキュメンテーションを配信
・活動ごとにA4　１枚のパワーポイントにまとめる
（写真・吹き出し・文章→姿・育ち・保育者の関わり等）

【発信頻度】
・クラス・チームごとの活動で育ちの変化が見られた際に随時配信
（約１ヶ月のプロジェクト保育期間中、合計17枚程度）

このように、育ちが見られた際にアプリ機能を使って配信する形に変更することで、タイムリーに過程や育ちを保護者と共有できるように工夫しました。しかし、タイムリーを心掛けることで従来のドキュメンテーションよりも発信頻度が多くなり仕事量が増えて負担がかかってしまうため、事前に担任間でドキュメンテーションのレイアウトや内容等を細かく話し合う時間を設けました。

【レイアウト】
・WordやPowerPointなど自分が使い慣れているツールで作成
・毎回レイアウトを変えずに、同じテンプレートで作成

	クラスの育ちを伝える際	チームの育ちを伝える際
写真枚数	１～２枚程度	写真・吹き出しメインで３～５枚程度
実際のドキュメンテーション		

○クラスだよりとの内容の重複を防ぐために…！

お店屋さんの製作期間中は、２日に１回はドキュメンテーションを配信して、園での様子を詳しく伝えることができました。そのため、従来は11月のクラスだよりはお店屋さんの活動をメインに書いていましたが、今回からはクラスだよりではなく“学年だより”という形でお店屋さん以外の活動の様子を伝えることにしました。そうすることで、発信内容が重複してしまう悩みを解消することができました。

お店屋さんの取り組み以外に、子どもたち主催のつなとり大会が行われため、その様子をたっぷりと学年だよりで伝えることができました。従来ならお店屋さんごっこの活動も含まれていたため、クラスだよりで伝えたい内容が盛りだくさんでしたが、見直したことですっきりと活動ごとに様子や育ちを伝えることができました。

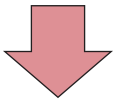
【ドキュメンテーションを工夫したことで】

○子ども理解

クラス全体の育ちだけでなくチームの育ちもまとめることで、子どもの姿からの育ちや取り組みの過程の大切さを順序立てて整理することができました。また、ドキュメンテーションを作成していく中で、チームごとの子どもに合わせて大切にしていきたいことや次なるステップが明確になっていき、子どもへの声掛けなどの関わりがしやすくなっていきました。

○保護者の反応

家であまり園での様子を話さない子が、園で製作している様子やその中での悩みも家で話すようになり、家での対話が増えたという声が多く上がりました。また、作品に対しての感想だけでなく、上手くいかずに失敗をしてつまずいたり試行錯誤しながらもがいたりする様子も伝わっており、肯定的に子どもたちの育ちを受け止めてくださる方が増えてきました。



改めて可視化する発信方法や目的を考え直すことで、発信したい内容にあった可視化の方法を少しずつ見出すことができてきました。また、可視化して満足するだけでなくその成果を振り返ってみることで、保育者の子ども理解が深まるだけではなく、保護者にとっても保育の理解や子どもたちの育ちの見方の変化が成果として得られることが明らかになりました。可視化の方法を増やしていくことが目的ではなく、可視化をする上での課題やどのようなことを伝えたいかのねらいを考え直し、それらに沿った可視化の方法を見つけて改善しながら実践を続けていきたいと思います。

2）研究テーマ②『つい語りたくなる』記録とは

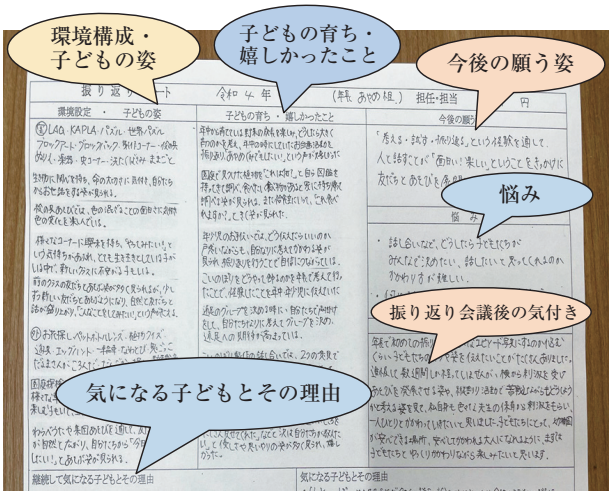
各園のドキュメンテーションの事例を持ち寄り共通点や相違点等を話し合う中で先生たちの悩みや思いがわかるのではないかと考えアンケートを取った研究テーマ①での結果を元に、それぞれの園でできることを実践していきました。すると実践していく中で、**『つい語りたくなる』記録とは**という新たな問いが生まれました。

『つい語りたくなる記録』を目指して、
職員間で子どもの育ちを共有することの大切さ
～ポジティブに捉えながら育ちを共有したい～

私たちのグループでは、日々の子どもたちの活動を通しての育ちをいかにわかりやすく伝えるのかということに関して大切なことはまずは職員どうしがしっかり子どもたちの姿や育ちを共有することの大切さに気付き、『つい語りたくなる』機会を設けるなど、職員間の共有方法等について各園で事例を出し合いました。

その中から２つの事例を紹介します。

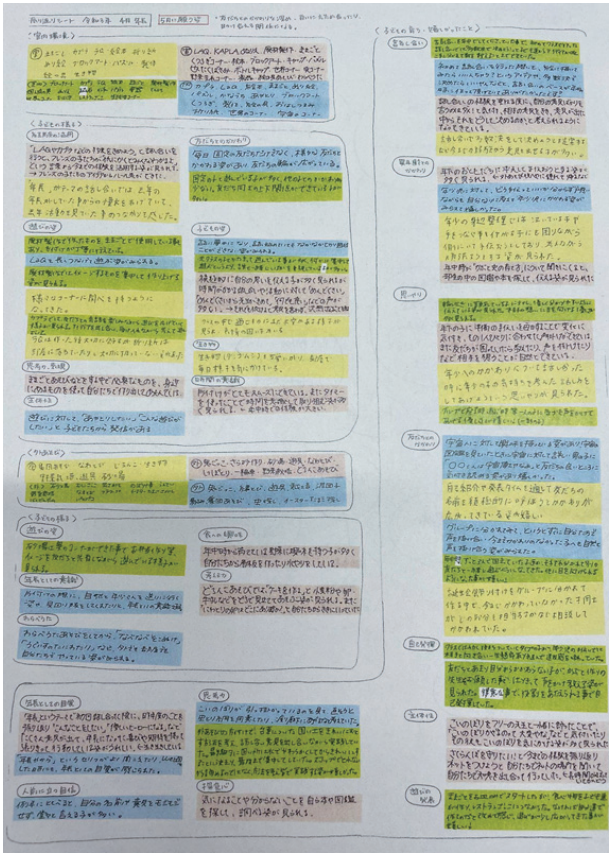
事例①子どもの姿・育ちの共有のための振り返り会議　～写真で子どもの育ちを語る～



↑各クラスの月の振り返りシート

振り返り会議では振り返りシートと、子どもたちのあそびや活動の様子で「嬉しかった場面・育ちを感じた場面」について写真を用いて、１人５分以内の持ち時間で話します。

※現在は全職員がタブレットを持っているので、子どもの表情や様子などが繊細に見えるため、写真を印刷したものではなく共有ファイルを共有して、タブレットで写真を見ながら振り返り会議を行っています。



↑個人の振り返りシートを学年でまとめたもの

『つい語りたくなる』振り返りを行うためにこの３点を心掛けて
毎月月末に振り返り会議を行っています。

①話しやすい雰囲気作り

⇒対話が増えることで職員どうしで助け合いながら共に学び合う職場に

②ネガティブ面ではなくポジティブ面を話す

⇒他職員から「いいね♡」と褒めてもらうことで、自信に繋がる！

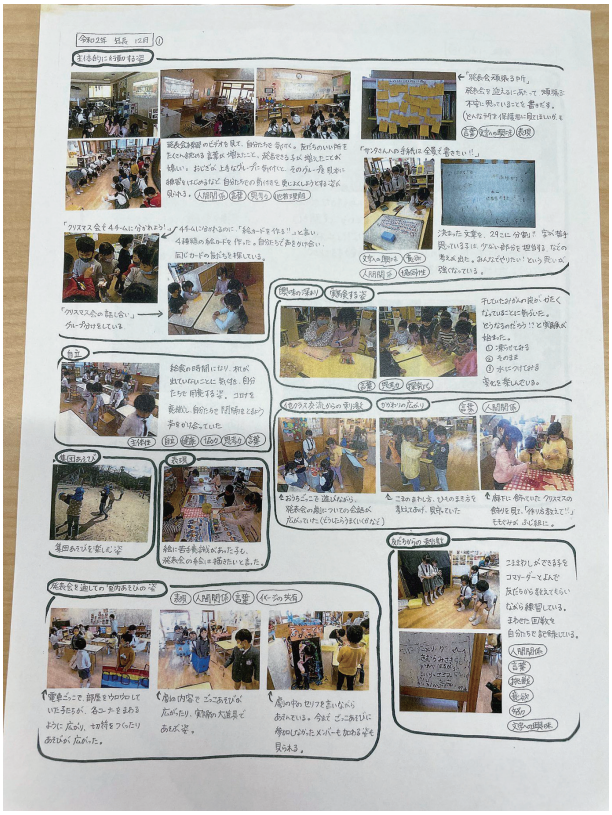
③時間を決める

⇒限られた時間の中で話すことで自然と端的に保育を語れるように

ポジティブな面を話すことで、楽しく話しやすい雰囲気の中、次に願う子どもの姿を話し、次月の保育に活かすようにしています。また職員間でアンケートを取った際に、特に経験年数が浅い先生に多くあがっていたのが、育ちを簡潔にまとめて書くことや、子どもの活動や姿と育ちを結び付けて話すことが難しいという回答でした。その対策としても限られた時間の中で端的に話すということを普段から経験するというねらいから時間を決めて振り返り会議を行っています。

事例②各学年・預かり保育・園庭環境など職員全体での共有

このように振り返り会議での写真エピソードを各学年、園庭環境、預かり保育ごとにまとめています。職員全員で回覧し、子どもの活動の様子・育ち、悩み、次月のねらいなどを共有できるようにしています。



←振り返り会議での事例を各学年ごとにまとめたもの

←10の姿と写真エピソードの育ちをつなげてまとめ、保護者に発信

振り返り会議ででたエピソードを職員だけで留めておくのはもったいない！保護者にも伝えたい！という思いから、振り返り会議の内容をわかりやすくまとめ保護者に発信しています。自分の子どもの学年だけでなく、他学年の様子や育ちも知る機会にもなっています。

事例③園内研修

積極的に意見の交換を行い、研修がその後の実践と繋がるために研修方法も工夫！

①**全員での園内研修**

②**同僚性研修**

⇒気軽に話せる機会を作り関係性を深める

③**子どもを見とるビデオ研修**

⇒事前に子どもの姿を撮影したものを用いて様々な視点で意見交換する

④**保育の見合い**

⇒学年ごとに実際の保育を見学し合ったり撮影した動画を見て意見交換する

園内研修は、保育者が学びを共感・共有し、学んだ内容をもとに、安心して保育を実践することができることや、一人ひとりの資質を高めながらチームとして園全体の保育の質を高めることを目的として行っています。園内研修の良さは、自園の子どもの様子について考えることができることです。子どもの様子を動画に撮ったものを用いて、子どもの見取りを話し合ったり、実際に保育を見合ったりすることも行っています。また、大学の先生に年間３回園に来ていただき、様々な視点において教えていただくことも大切な学びの機会となっています。

◇取り組み後の変化◇　～良かった点～

・職員どうしの対話が増えた
・学年を超えた共有ができた
・自分とは違う視点を知るきっかけになった
・保育のイメージがつきやすくなり、子どもたちへのかかわり方に変化がでた
・自身の保育を振り返ることができ、自信が持てるようになった

職員間で共有することで、たくさんの良さがでてきました。職員で共有する時間を作り職員どうしの対話が増えたことで子どもの姿を捉え、子ども理解にも繋がっています。また、子ども理解だけでなく、自身の保育を振り返ったり、活動を展開していくための計画や準備、クラスとしての成長や課題なども見えてくるので、よりよい保育環境作りができることや、自身のスキルアップにも繋がるという実感がありました。職員が主体的に考え相談しあえる環境を整え、いつでも気軽に話し合える雰囲気を常日頃から作り出していくことが大切だと感じています。

『つい語りたくなる』記録を通して…
保護者と子どもの育ちを分かり合い、喜び合いたい！

『つい語りたくなる』記録を通して、保護者と子どもの育ちを分かり合い喜び合えることをめざして、どのような可視化の工夫をしていけばいいのか各園で様々な実践を行ってきました。研究テーマ①でご紹介したせんりひじり幼稚園のドキュメンテーション（お店屋さんごっこ）の実践事例は、『つい語りたくなる』記録の研究にも結びついています。

研究テーマ①でも記載させていただいたように、従来はデータで打ち込んだものを紙媒体にして保育室に貼り出していましたが、アプリ機能を使って電子媒体でドキュメンテーションを配信する工夫を行いました。

電子媒体にすることで、今日撮った写真・見られた育ちやおもしろエピソードなどをすぐにデータに書きおこし、アプリで配信することが可能となりました。

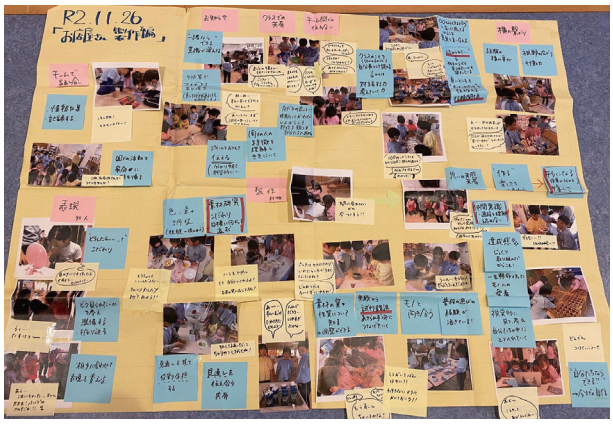
その結果、「早く保護者に今日のこのエピソードを伝えたい！」と『つい語りたくなる』記録の作成へと繋がっていきました。また、保護者へもその日の育ちをその日のうちに配信することで、園での様子をいち早くタイムリーに共有することが可能となりました。

○『つい語りたくなる』記録を継続するために

お店屋さんごっこだけでなく、今後の活動や行事でも『つい語りたくなる』記録を継続していくために、心掛けてきた点をご紹介します。

①保育者間で育ちの見通しを共有する

月案でお店屋さんごっこの活動の流れを確認する際に、昨年度の月案でまとめていたお店屋さんごっこの写真を見ながら、育ちの過程や育ちごとの保育者の関わり等を担任全員で共有しました。特に初めて学年を持つ担任が活動のイメージが膨らみやすいように、この時間を大切にしています。



その結果、初めて学年を持つ担任からは活動

のイメージが膨らんだことでドキュメンテーションの作成に取り掛かりやすかったという声が上がってきました。

②保育後の仕事内容や時間を見直し、工夫する

保育後にドキュメンテーションを作成する時間を設けて、無理なく作成ができる仕事環境作りを工夫しました。

従　　来	改　善　後
15：00～　打ち合わせ開始 17：00頃　保護者へ電話 次の日の保育準備 ドキュメンテーション作成	（送迎後）ドキュメンテーション作成・配信 15：15～　打ち合わせ開始

全てのことを終わらせてから各自の時間にドキュメンテーションを作成していたため、つい後回しとなり持ち帰りで作成することが多くなっていました。しかし打ち合わせまでにドキュメンテーションを作成する時間を設けて改善した結果、後回しにならずスムーズに作成に取り掛かり、アプリですぐに配信することができました。その為、保護者へも保育後にすぐ園での様子を伝えることが可能となりました。

③『つい語りたくなる』写真を撮る意識をする

ドキュメンテーションを作成するにあたって、写真は欠かせないものです。しかし、欠かせないからといって、多くの写真を撮ろうとすると大量のデータから写真を選ぶことに時間を要してしまいます。そこで、写真を撮る際にも『つい語りたくなる』写真を撮る意識を持つことで、写真選びの際だけでなく語りたい写真をすぐさま選ぶことができ、ドキュメンテーションを作成する際にも、育ちを文章として書きおこしやすくなります。

○『つい語りたくなる』記録の工夫の成果・課題

研究テーマ①の実践例でも記載しているように、家庭での対話が豊かになり、活動の過程の中で子どもたちの葛藤や苦労を保護者に気付いてもらうことができました。それらを理解し気持ちを汲んだ上で、家庭で子どもと向き合って対話をしてもらうことで、子どもの心が満たされていきます。保護者と育ちを分かり合いたい思いで作成したドキュメンテーションが、結果的に子どもたちにも成果として繋がっているのではないかと感じました。

しかし『つい語りたくなる』記録の発信を各園で工夫してきましたが、保護者の声から課題も浮かび上がってきました。

発信ツールを紙媒体から電子媒体に工夫をする中で、すぐに切り替えが難しく移行期間が必要となってきます。その期間中、それぞれの活動に対してどの発信方法が適しているのかと保育者は模索が必要であり実践を重ねていきますが、その際に保護者側に立ってみると紙媒体と電子媒体の両方からの発信があり、「情報量が多い」「発信ツールをしっかりと絞ってほしい」という意見があがりました。また、ドキュメンテーションを通して家庭で対話のきっかけとなってほしいという保

育者の思いがありますが、共働きの保護者からは対話することがプレッシャーに感じているという声があがってきました。

保護者の声に耳を傾けながら、園として考えているねらいをしっかりと保護者に伝えて理解をしてもらいつつも、保育者側もただ発信しつづけることがいいことと思ってしまわず、その都度課題と向き合い改善しながら、それぞれの園に適した方法で『つい語りたくなる』記録の継続を行っていきたいです。

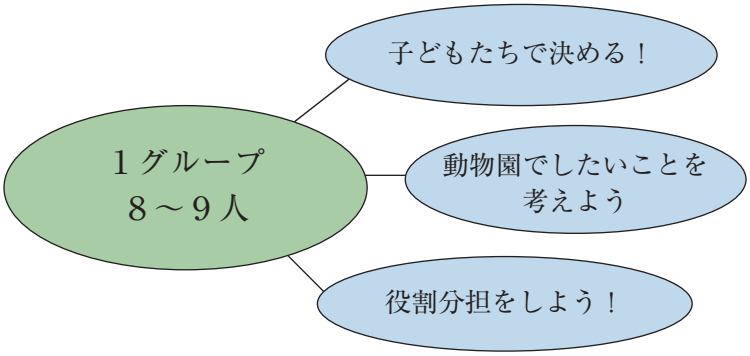
子どもたちもドキュメンテーション作りにチャレンジ！！
～遠足の様子を伝えよう！～

子どもたちにも『つい語りたくなる』という機会を作ってみることで、子どもたちの自信や話したい、という意欲に繋がるのでは？と思い、自分たちで遠足に行ったドキュメンテーションを作ることにチャレンジしました。その取り組みの過程と様子・育ちについてお伝えします。

◇秋の遠足で動物園へいこう！◇

遠足では「自分たちで決めてできた」という達成感を味わってほしい、という願いから、グループ行動の時間をとっています。

～グループ行動どうする？～

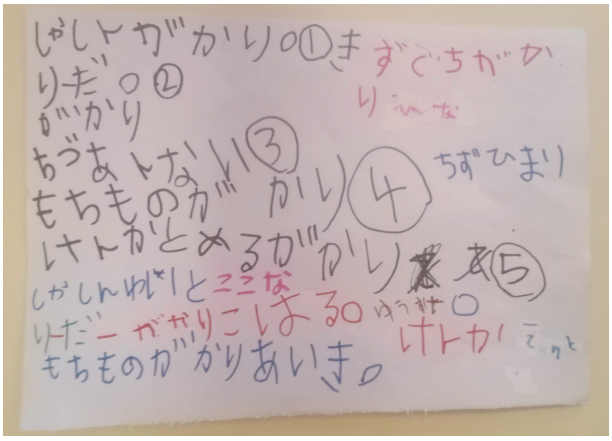


《遠足までの取り組み》

事前に遠足後にドキュメンテーションを作ることを伝え、遠足に向けて子どもたちと話し合いながら進めていきました。

1．どんな役割が必要か考えてみよう！！

遠足当日まで、どうやってグループを決めるのか、どの動物を見たいのか、何をしたいのか、例えば、動物の写真を撮りたい、動物を触ってみたいなどを考えます。そしてそこからできることを決め、役割はどうするのかなどグループで相談して準備をしていきました。

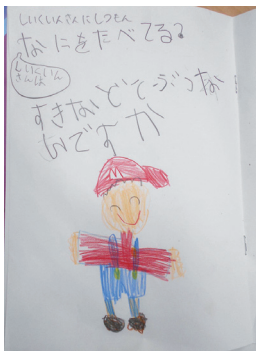


←実際のグループの役割です
①写真係　②きずぐち係（処置がかり）③リーダー
③地図案内係　④持ち物係　⑤けんかをとめる係などと各グループで、どのような役割が必要なのかを相談して決めました。

2．楽しみにしていた遠足当日

↑地図担当が中心となり見たい動物の場所を確認している様子

↑カメラ担当が写真を撮っているところ



←飼育員さんに
質問したい内容を
まとめたノートを
持って動物園へ！

遠足当日は写真を撮ったり、園内マップを見て確認したり、飼育員さんに質問したりなど、グループで友だちと協力して自分たちの「やりたい」がたくさん詰まった遠足となりました。とても生き生きとしていた子どもたち！遠足当日はもちろん、事前の準備の中でも、自分たちが計画したことを実行していく子どもたちの行動力は、本当に素晴らしいものでした。遠足の次の日にクラスで振り返り、いよいよ子どもたちとドキュメンテーション作りに挑戦しました。

3．楽しかったことをみんなに伝えたい！ ～ドキュメンテーション作り～

遠足後のポスター作りでは、動物園で見てきた動物や学んだ情報を一人ひとりが感想として書いたり、自分たちで撮った写真をパソコンで選んだり、グループみんなで協力し２時間程かけて作りました。

この取り組みの様子はクラスだよりでも保護者に発信し、共有しました。

↑ポスターに何を書く？！

↑パソコンで写真選び

↑写真の位置などを調節

↓こちらが完成したポスター（ドキュメンテーション）です。

「作って終わり」ではなく、この記録を通して対話が増えたり、次に繋がる記録にしたいという思いから、発表する機会を作りました。

4．楽しかったことをみんなに伝えたい！ ～発信する～

まずは、クラス内また年長クラス間での発表をしました。同じ学年（年長）の他グループの発表を見たときに「あのグループはこんな風に言ってたから次やってみる」など経験を活かす姿が見られました。このドキュメンテーション作りを通して、自分たちが感じたことが表現され、それを伝えその場で相手の反応を感じることができ、「伝えることができた！」という経験が自信に繋がりました。

↑各グループで完成したポスターを
クラス内で共有しているところ

↑年長のクラス間でポスター発表！
質問をして答えているところ

自信がついたことで、子どもたちから「もっと伝えたい！」という声が出て、他学年や保護者にも発表する機会を設けました。

〇年中児へ発表 ～年長さんになったらこんなことができるんだよ～

誰が何をどの順番で発表するのか話し合いをしてから、年中児への発表をしました。年長児の発表を聞いていた年中児は、「動物園行きたい！」「すごい、かっこいい！」と憧れの気持ちを持ち、年長児は「伝えられた！」という自信になりました。

日々の活動の中で異年齢の交流をすることで、年中・年少児が進級したときに、憧れだった気持ちが「やってみたい！」の気持ちに変わっていくことを願っています。

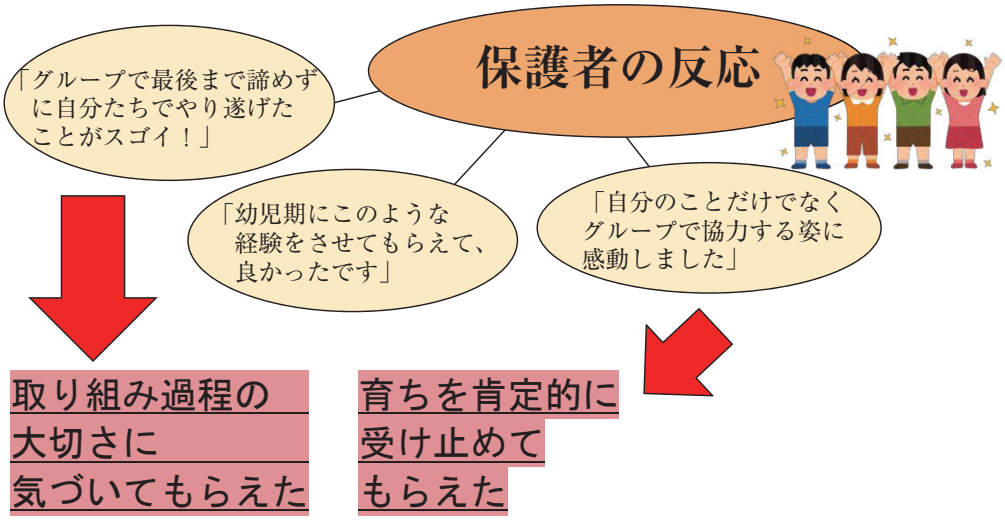
〇保護者への発信　～聞いてほしい！こんなことをしたんだよ～

生活発表会で、保護者への発表をしました。まずはグループごとに舞台に立って発表し、そのあと子どもたちと保護者が自由に会話できる時間を設け、交流時間をとりました。

↑どこを話しているか分かるように！と指し棒を作るグループも見られました。

交流の場面では、保護者がたくさん質問してくださったり、子どもたちも生き生きと答える姿が見られました。頑張る姿を保護者に見てもらえたことで、子どもたちの表情が充実感に溢れていました。このドキュメンテーション作りを通して、子どもたちが記録・発信して、対話する場があるということが子どもたちの自信や話したいという意欲に繋がるということが改めて分かり、その過程や育ちを可視化して保護者と共有することの大切さを感じました。

遠足ポスター発表の保護者の反応は…



発表後に保護者に聞いてみると、上記のような感想を持ってもらえました。

保護者に対してその時々に合った可視化を行うことで、子ども理解が深まっていくことを実感しました。

この取り組みを通して、子どもたちの生き生きと行動する姿を見ることができ、その姿を保護者に伝え、実際に見てもらえたことで、育ちを共有することができ、とても良かったと感じています。

3）全体のまとめ

プロジェクトが始まり、グループでドキュメンテーションについての事例を整理する中で、さまざまな手段や目的で各園の実践があることを知るところから始まり、「保護者へのドキュメンテーション」に焦点をあて、さらに各園の実践を深く理解するために、アンケートを実施しました。

・配信・作成方法の視点（相違点）・育ちの共有の視点（共通点）・子ども理解の視点（関心）の３つの視点で深掘りをしていく過程で、ドキュメンテーションという成果物に至るまでに、実際に作っている保育者の子どもの理解が深まることや、先生間のコミュニケーションが生じることなど、副次的な効果があることがわかりました。またドキュメンテーションをきっかけに他の事務仕事でもデジタル化が進んだという園もありました。

この紀要を読んでいる方の中には、現状どのような目的・方法でドキュメンテーションをしているのかについては、様々なのではないかと思います。

ドキュメンテーションをまだ実施していない先生方については、その副次的な効果、保育者の子どもの理解が深まることや、先生間のコミュニケーションが生じることなど、にも着目していただき、実際に園でやってみるきっかけになれば嬉しく思います。

また作ってはいるが、もっと良くしたい、と思っている先生方には、先にあげた実践例を参考にしていただければ幸いです。

プロジェクト後半では「つい語りたくなる記録とは」というテーマをもとに研究を進めました。その中で見えてきた「つい語りたくなる」要素として、「育ちを肯定的に捉える」、「見せたくなるような写真」、「対話を促すような言葉選び」という３つの要素が見えてきました。

「育ちを肯定的に捉える」ことが、「保育者間で子どもの育ちを伝え合う」ことに繋がり、「保護者に肯定的な育ちの共有」ができ、「「対話を促すような言葉選び」をすることで保育者と保護者、保護者と子どもの、対話が増える」ということもわかりました。また一つの園では、保育者が作っているドキュメンテーションを見た子どもが、自分たちもやってみたい、ということにつながることもありました。

子どもたちに対して「つい遊びたくなる環境の設定や言葉がけ」を日々行っている先生方、子どもの育ちを伝える際に、先生たちが思う、「つい語りたくなる」というキーワードをもとに各園でもドキュメンテーションを作ってみていただければ、そのドキュメンテーションはより良いものになっていくのではないでしょうか。

第４章

見たい！知りたい！伝えたい！
～明日の保育に繋がる保育記録～

１）研究の目的
２）『日々の保育記録』について感じていること
３）第4グループが見つけた問い！
４）保育の記録がもつ意味とは…
５）実践事例

1）研究の目的

「記録の可視化」がテーマの第29次プロジェクトで、私たち第４グループでは【保育記録の可視化】に注目して研究を進めていくことにしました。保育者の日々の記録をより充実させることが、子ども理解に繋がり、保育の質を高めていく原点だと考えたからです。

保育を担っていくものの責務として、日々の保育の振り返りや反省を書き留める“保育記録”というものが必要とされ、各園様々な書式の中で取り組まれているかと思います。

日々の保育を振り返る保育記録は、子ども理解を深め保育をより良くしていくためのツールであるべきです。しかし、業務に追われる現場の保育者からは、“書かなければならない”というネガティブな気持ちで保育記録に取り組まれている声が多くありました。その側面には、保育記録が本来担うべきはずの【子ども理解に繋がっている成果が得られない】【明日の保育への活かし方がわからない】といった問題点があるのではないかと考えました。

では、その問題点をどのように解決すれば良いのか？

“書かなければならない”➡“書きたくなる”ポジティブに捉えるためにはどのような方法があるのか？

保育者が思わずその記録を見たくなる、子どものことを知りたくなる、見えてきた育ちを誰かに伝えたくなる…**保育者の主体的な力を引き出すことができる記録の可視化**について深掘りしていきたいと思います。

2）『日々の保育記録』について感じていること

・１日の感想文、反省文になってしまっているのではないか。そもそも振り返りとは、どうやって書けばいいのかわからない。
・意外と共有物になっておらず、自分の感じたことだけで子どもの見取りをしてしまっているのではないか。書いているが自信がもてない。
・書かないといけないものだから、書いている。毎日、しんどい。
・字ばかりで読み返しにくい。書きっぱなしになっている。

など……

第４グループ内でも、実際このような疑問、マイナス感情を抱え取り組んでいる現状がみられていました。また、園内でも以下のアンケートを実施してみました。

Ｑ１．子どもの記録について、どのような内容の記録をとっていますか？

⇒今日一日で頑張ったこと、できるようになったこと、印象に残ったエピソード
どのような遊びをしていたか、排泄の様子、子どものつぶやき　　など…。

Ｑ２．１日どれくらいの時間を使って記録していますか？

⇒経験年数の差や個人の得意不得意による差もあり、解答された時間として15分～２時間という大きな枠での解答がでた。
“日々の保育の記録”を書くにあたり平均30分前後を作成に必要としている方が多いことがアンケートより読み取れた。

Ｑ３．記録をとる中で、困っていること、気になること、問題点や聞いてみたいことなどはありますか？

⇒どのような内容で、どのように記録しているのか。
どのように書いたら、まとめやすく、振り返りやすいのか。
記録が見やすい方法はないか。
忙しい時には記録することに時間が取れず、継続して記録を取ることが難しい。
どの程度の記録が必要なのか。
他の人がどれぐらい記録しているのか知らない。
子どもによって気になる部分が違い、差が出てしまう。全員を記録する方法は？
毎日変化のない内容で良いのか。
文章に起こすのが難しい場合がある。
記録の取り方に「これでいいのか」と自信がもてない。
どのような視点で記録をとるのか、園内研修をしてほしい。　　など……

アンケート結果からも、日々の保育記録をとっているものの、“自信がもてずにいる”ということ、“うまく保育に活用しきれていない”充実感を得られていない現状がうかがえました。

3）第４グループが見つけた問い！

明日の保育に活きている実感が持てることで、
保育記録に対する心的負担は減るはず！

では一体、どのような“保育記録”だと、保育に活かすことができるのでしょうか…??
そもそも、保育の記録とは、何のために書いているの…??

4）保育の記録がもつ意味とは…

『保育の記録』は、業務上必要なものだから！ではなく、
◎子どもたちの興味関心、遊びの動向を見取るためのもの！
◎生活や遊びの中で、子どもたちの何が育とうとしているのかを記していくためのもの！
◎育とうとしている部分へ、どのような環境構成を必要とし、どのような関わりをしたのかを記していくことで、実際の保育が整理され、明日への見通しにつながる！

つまり！保育の記録とは…

★子どもの育ちを見取るために必要なもの！
★保育の質を高めるために必要なもの！
と考えられるのではないか。

そこで、第４グループ（６つの園）内で、互いの園で実践していることを知り、自園の取り組みを見直し、無理なく取り入れられる範囲で取り組んでいくことで、記録の充実をはかりながら、実践を繰り返し、研究を進めていくことにしました。

５）実践事例

Ⅰ．サイクルで考える保育記録の実践

明日の保育に実践しやすく子ども理解を深めるためにはなにをどのように書けば良いのか、さらに保育者が意欲的にやってみたい！と思えるような工夫について「サイクル」を活用した記録方法の事例を交えてお伝えしていきます。

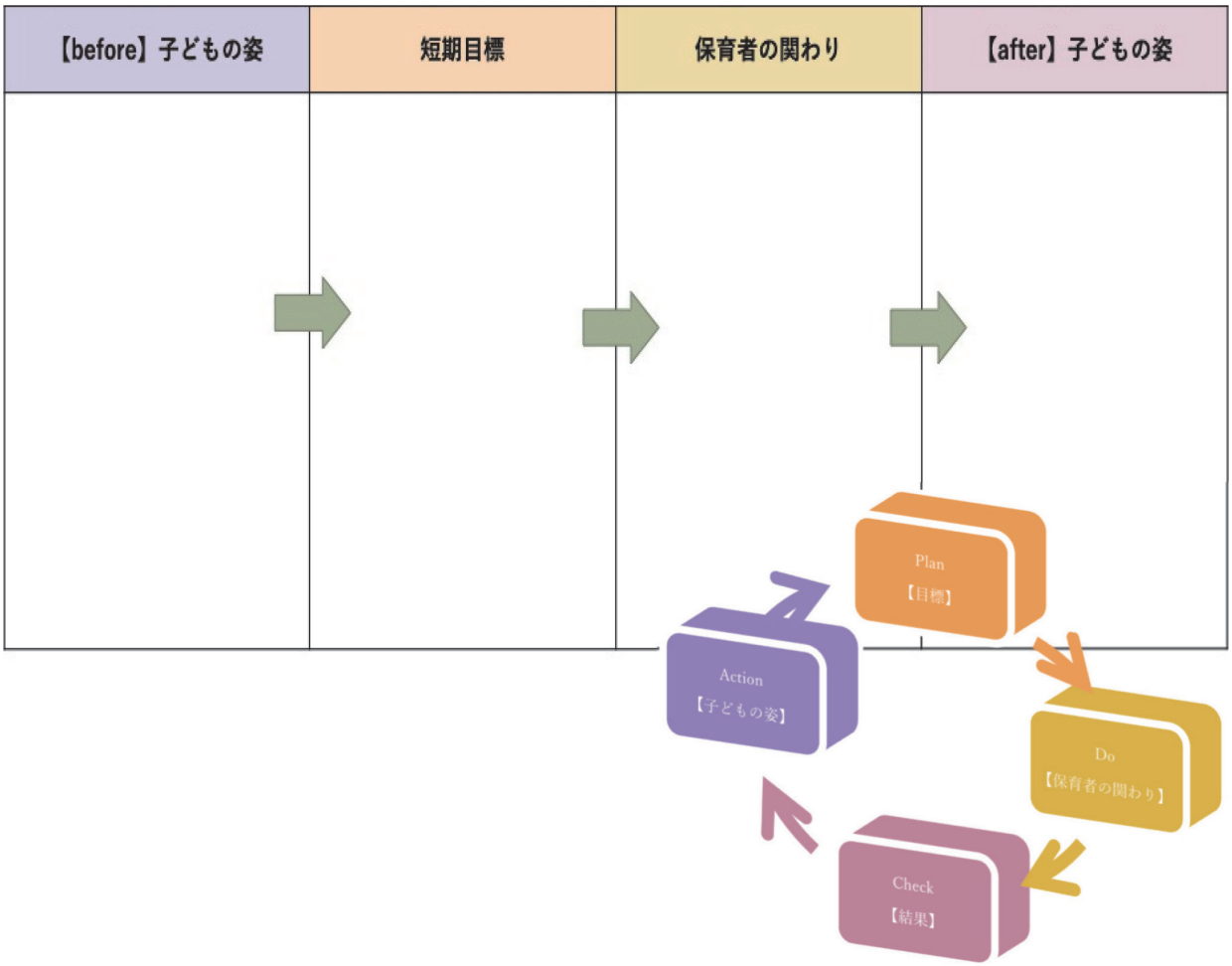
PDCAサイクル
（Plan、Do、Check、Action）
OODAサイクル
（Observe、Orient、Decide、Action）

業務管理などにおける継続的な改善や振り返りとして様々な分野で用いられるのが、PDCAサイクルやOODAサイクルといった方法です。

４つの項目に分類して考え、それらをサイクルとして段階的に振り返っていきます。

難しく聞こえるかもしれませんが、フォーマットが決められていることで書きやすさが高まり、項目に分けられ継続性が目に見えてわかるので見返しやすくなるのも大きなメリットの一つです。

実際にこのサイクルを保育記録に当てはめてみると…



○実践方法

1週間のスパンでサイクルを完成させていきます。週の終わりに、子どもたちの現在の姿を【Before】の項目に記録し、そこから短期目標と保育者の関わりを記録します。週明け、毎日保育後にどのような変化があったのか？また、新しい子どもの姿が見られた際には書き足していきます。

【Before子どもの姿】
・**写真と子どもの声を記した吹き出しを用いること**で、子どもの姿や声がイメージしやすくなる。
・現在のクラスで多く見られる姿をピックアップしたり、保育者が気になっている姿をピックアップしたりと、選び方は様々。**保育者自身の心が動いた瞬間に写真を撮る**意識を！

↓

【短期目標】
・一歩先のステップとしてどのように育ってほしいか？を考える。
・目標が高くなりすぎないようにすることも大切。

↓

【保育者の関わり】
・短期目標を達成させるためにはどのような関わりや環境設定をするか？
・具体的に考えることで、より実践しやすい関わりができる。

↓

【After子どもの姿】
・子どもの姿がどのように変化したのか？
・また、新たに見えてきた姿があったのか？
この項目が、次のサイクルのはじまりになっていきます。（別の内容に変更してもOK）

実際に記録をしていくと…

今どんな姿がある？ どんな力が育とうとしてる？	次のステップ どんな力が育とうとしてる？ どんな育ちを目指す？	そのために必要な 保育者の関わりは？ 環境設定は？	子どもの姿が どう変化したか？ ★ここが次のサイクルの 最初になる
【before】子どもの姿	**短期目標**	**保育者の関わり**	**【after】子どもの姿**
 おれたちより おおきくなってきた！ ・数人で積み木をどれだけ高く積み上げられるかをドキドキしながら挑戦して遊んでいる。	・ドキドキ感やスリルを友達と共有 →どこまで高く積み上げられるかチャレンジ ・遊びを継続・発展させていく面白さを感じる →「のこしておきたい！」「明日もやりたい！」と思えるように	・積み木の数を増やす →他のクラスの子どもと一緒に取りにいく ・椅子や脚立を用意 ・次の日も続きができるよう壊さないで置いておけるスペースを確保する	・椅子や脚立、いつもは使えない方法がより特別感に繋がっていた！ ・置いておけるスペースを作ることで次の日に続きをする姿が。違う子が興味を持つきっかけにも！ ・「こわさないでね」どうしたらこのまま置いておけるか考える姿も。

○写真と子どもの声を記した吹き出しを用いることの重要性

文字の羅列で記録していくことで、だらだらと一日の様子を書きがちになったり、「～しておくべきだった。」「～ができなかった。」など、保育者の動きや環境の構成の仕方がどうであったのかなど“保育者が主語”となった振り返りが増えてしまったりと、なかなか“子どもの育ち”を視点においた保育記録が取りにくい現状がありました。

そういった問題点を解決する一つの方法として、【写真】を用いることはとても大切だと考えます。「写真に写る○○くんが～～していて…」と自然と語る際に“子どもが主語”となります。また、場面の状況が記録者以外の保育者にも伝わりやすく、吹き出しをつけることでより想像しやすくなります。

実際に子どもが出している声→ ～～なって

実際には子どもが出してない心の声→ どうなってるんだろう？

実際に子どもが出していない心の声は、保育者の想像で膨らませるしかありません。ですが、この心の声こそその時にどのようなことを考えているのか？子どもの育ちを理解するとても重要なポイントです。その場の状況や写真に写る子どもの表情から心の声を可視化することで子ども理解に繋げていきましょう。

○心が動いた瞬間に写真を撮る意識を！

子どもと関わる中で、保育者自身が“面白いな”“不思議だな”“素敵だな”などと心が動く瞬間がありますよね。実は、その瞬間に写真を撮ることでより子ども理解を深める手がかりになっていきます。

保育者の心の動く瞬間＝子どもの心に変化が訪れた瞬間

→その変化とは何なのか？そこには必ず新しい発見があり、その子が今育っている部分や、育とうとしている部分が見えてくるはずです。

○見えてきた成果…

☆プロセス（過程）の大切さを感じることができた。

→サイクルで見ていくことで、姿から具体的な保育者の関わりに繋げやすくなった。

具体的な関わりが分かることで、明日の保育に繋がる実感が得られた。

☆子どもたちは何に興味を持っているのか？を見つける手がかりにもなった。

☆一見マイナスに捉えられがちなエピソードも、そこに隠れている育ちを見つけられることでプラスに捉えることができるようになった。

○新たな課題…

・「短期目標」を考えるのが難しい

→この目標で合ってるのかな？この見取りであってるのかな？

１人で考え記録していると“自分の子ども理解”が不安になってくる。

★保育者どうしで一緒に考えられる記録はできないか？

○実践方法

サイクルの書き方は変えず、一緒に保育をする保育者が自由に記録を見たり書き込んだりできるようにしておく。

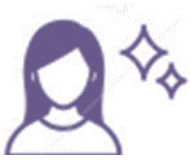
共同で作成した記録→
２人の保育者がどのように分担して記録したのか分かるようピンクと黄色のラインで色分けをしている。

○見えてきた成果…

担任の声

・他の先生に意見をもらえるから、自分の記録に自信が持てるようになった！

・自分では見えてなかった視点も見つかって更に学びに繋がる！



補助、副担任の声

・今、担任の先生ってこれを大事にしてるのか！

・ねらいもはっきりしてるから関わり方の方向性も見えやすい！

☆保育者どうしの対話が増えた

→共有の記録を見ながら、子どもの姿や育ちを自然と語り合う時間が生まれた

☆保育の方向性を再確認できることで、連携しやすくなった

→ねらいや保育者の関わりを可視化していることで、複数の保育者がいても同じ関わり方ができるようになった

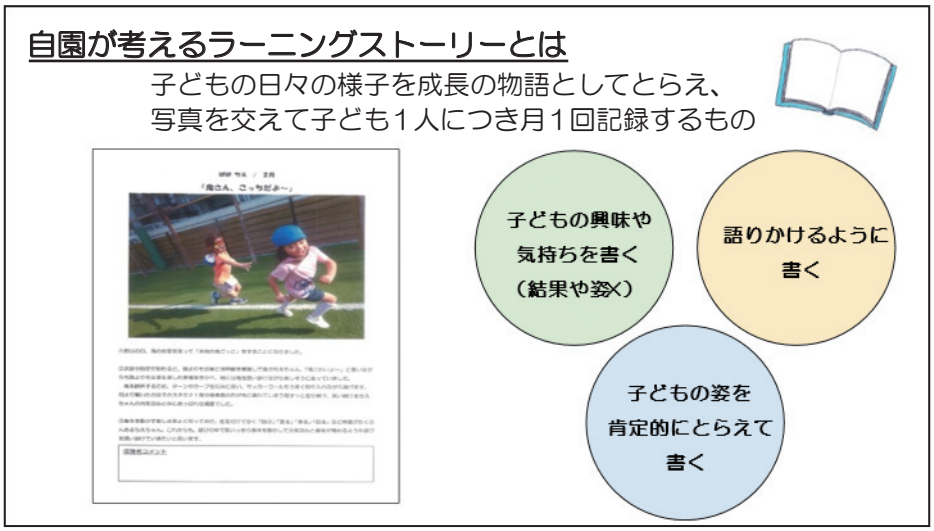
より多くの保育者の視点で語り合うことで、さらに新しい視点が生まれ
一層子ども理解が深まっていくことがわかった！

明日の保育に実践しやすく子ども理解を深めるためにはなにをどのように書けば良いのか、さらに保育者が意欲的にやってみたい！と思えるような工夫について「サイクル」を活用した記録方法の事例を交えてお伝えしました。

大切なのは、無理のないペースで続けていくことです。自分のやりやすい書き方で行い、１週間１エピソードぐらいで試してみてください。

子どもを理解をすることが楽しくなれば“書きたい！”と思う原動力に繋がるのではないかと思います。

Ⅱ．ラーニングストーリーの実践



●ラーニングストーリーが導入された経緯

本園では、４年前からラーニングストーリーを導入しました。それまで保護者に子どもの姿を伝えるツールは、連絡帳のやりとりや送迎時の伝達でした。そして、以下のねらいから、連絡帳が廃止され毎月のラーニングストーリーが始められました。

保育者へのねらい

▶連絡帳における作業的要素の強さを軽減し、ラーニングストーリーを通して保育者の学びの時間を増やすため

▶保育者の休憩時間や残業の軽減のため

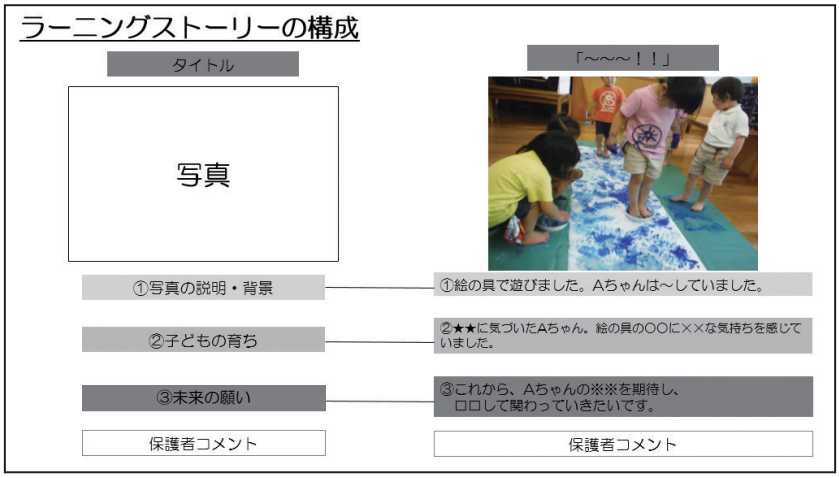
▶子どもの興味関心や育とうとしている力を基に、環境の再構成をする力を養うため

保護者へのねらい

▷子どものありのままの姿だけでなく目に見えない育ちを共有したい

▷園の保育の意図や保育者の関わり方を伝えることで、子育てにも活かしてほしい

以下が、ラーニングストーリーの構成です。



●導入のための、園内研修　～子どもの育ちってどうやって見取るの？～

導入にあたって副園長からレクチャーがありました。「ラーニングストーリーとは何か」「始めるねらい」に加え、「普段の保育で、子どもの育ちを読み取るには？」という視点を学ぶため、１枚の写真（右）を基に、職員がそれぞれ気づきや考えを伝え合い、皆で共有しました。

レクチャーを以下にて再現します。

副園長：**これはどんな場面でしょう。表情や周りの様子から読み取ってみよう**

保育者Ａ：思い切ってジャンプしようとしている場面？

保育者Ｂ：お姉ちゃんからのアドバイスに耳を傾けている場面？

保育者Ｃ：跳ぶ勇気が出ず怖がっている場面？

それでは、その場面からどんな育ちが読み取れると思う？５領域に当てはめるとどれかな？

戸外で思い切り身体を動かそうとしている→≪健康≫

友達の教えを受け入れてやってみようとする→≪人間関係≫

怖い気持ちと頑張りたい気持ちの葛藤→≪表現≫

どのような場面にも育ちが隠れているね。１つの場面でも、様々な領域から育ちが見取れるよ。では、今後どのような育ちをこの子に期待して、保育者として関わる？

より多くの身体遊びができるようにサーキットを用意する！

友達の意見から遊び方や気づきが増えるよう、異年齢交流を設ける

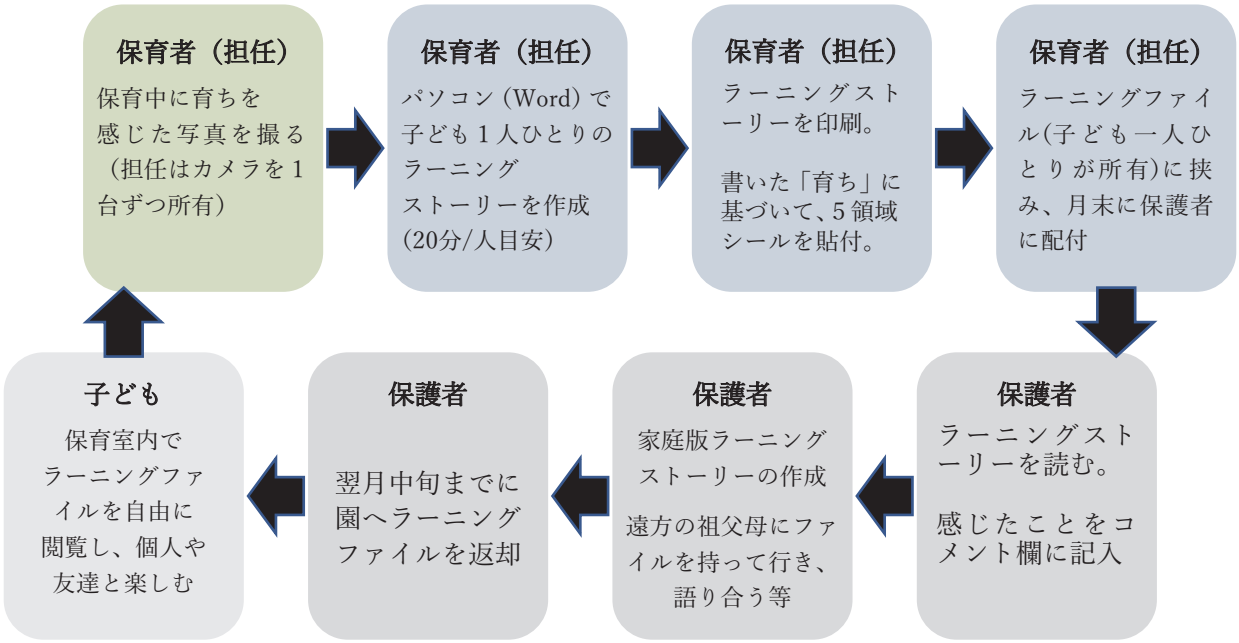
勇気を出せた達成感も、諦める勇気も尊重して、共感的な関わりをする

保育者が読み取った姿や５領域の視点によって、その後の関わり方（保育の方法）は変わるね。正解は１つでは無い。普段の保育から「この子の育ちは？」「私に何ができる？」と考えながら環境を用意していきたいね。

●実践 ～一方通行でない、伝え合いのツールへ～

レクチャーがあったことで、全職員共通でラーニングストーリーの意図や、子どもの育ちの見取り方について共通認識が取れたことが実践の第一歩となりました。

そして、以下のような手順でラーニングストーリーの作成と発信が始まりました。



それまでの連絡帳による文章でのやりとり（エピソード中心）から、育ち中心の発信ツールとなったことで、保護者からは様々な賛否両論がありました。

しかし、写真があることで子どもからエピソードが聞き出せたり、保育者との対話に繋がったりする効果もありました。

また、一方通行の発信ツールでは無く、保護者コメントや家庭版ラーニングストーリーによって、子どもの育ちを「伝え合う」ツールとなったことが大きな変化となりました。

保育者も始めは手探り状態でしたが、保護者からの反応や、伝え合いを励みに、毎月の写真撮影や育ちの見取り、文章化に取り組み続けました。

保育者がラーニングストーリーを始めて得た成果（アンケートから抜粋）

- 「先生のラーニング（ストーリー）は心がこもっていい」と実際に言われた
- 「写真で様子が分かりやすい」「毎月楽しみにしている」と保護者に声を掛けられた
- 「子どもと写真を見て、課題について話せました」というコメントが返って来た
- 「ナイスショットです！場面がよく伝わります」というコメントを頂いた
- その時の状況が浮かびやすく、後から自分で見返しても楽しい
- 保護者からの返事が楽しみ。それをまた子どもから聞けて話題が広がる
- 保育中も、子どもがラーニングファイルを手に取って、アルバム感覚のように楽しんで見ていたり、友達と語り合ったりしている様子が嬉しい

●実践 ～取り組み２年目で出て来た悩みや不安～

実践を２年間続け、保育者間でもラーニングストーリーへの取り組み方や工夫が個々表れてくるようになりました。また、慣れてくるにつれて共通の悩みや不安が出て来たことが判明しました。そこで、第29次プロジェクトをきっかけに、ラーニングストーリーに関する保育者の悩みや工夫を把握するため、アンケートを実施しました。

【2021年３月16日～３月21日／幼稚園担任歴のある26名対象／自由回答式】

悩み①

保育をしながらクラス全員分の写真を撮ることが難しい！
みんなはどうやって写真を撮っている？どんな工夫をしている？

アンケートによる回答

- 育ちや、保護者に伝えたいことを思い描きながら写真を撮る
- 毎月何の育ちを伝えているか箇条書きしていたので、見れていない視点で撮るよう意識
- 子どもが話している言葉もきちんと聞いておく
- １つの遊びや何かに取り組んでいるところでも何枚か撮る。連写の活用
- 子どもが興味を持っていることや考えている姿、困っている姿、楽しんでいる姿などを汲み取りながら撮る。子どもの表情や、やっていることが分かりやすい写真を撮る
- 同じアングルではなく、様々な角度で撮る
- 子ども目線で撮る（こんな角度で子どもの世界が広がっていくのだと発見が多々あり）
- 子どもに気づかれないよう、シャッター音やフラッシュはOFFに

悩み②

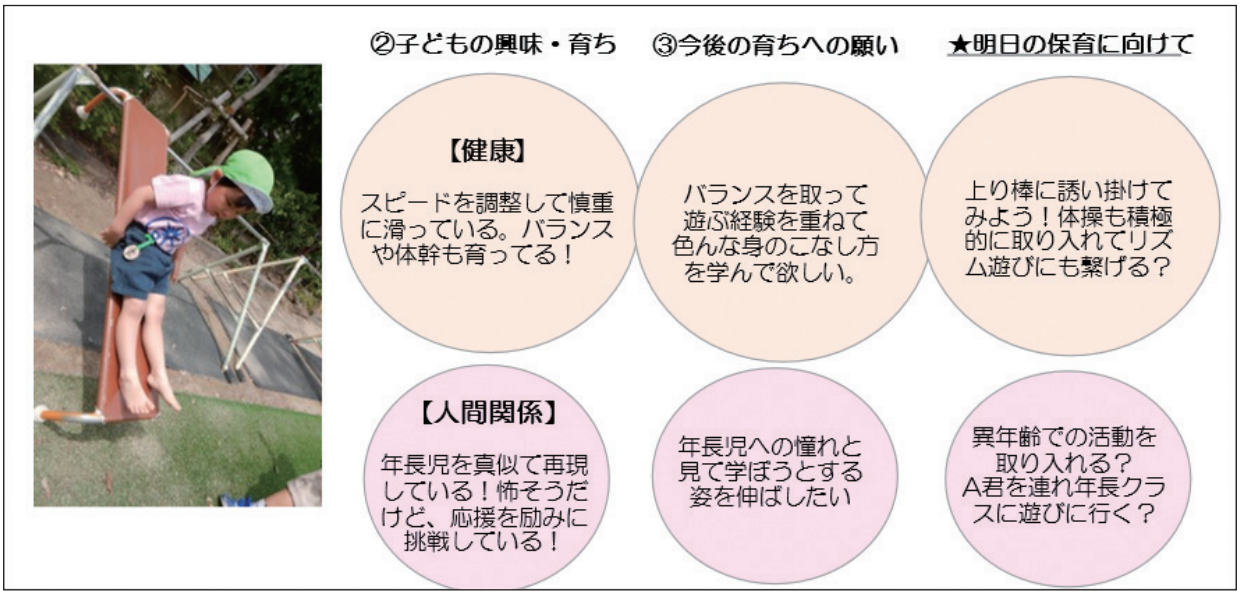
子どもの姿を見て育ちを見取っているが、これで合っているのか不安…
育ちの見取り方に関するアドバイスは？

アンケートによる回答

- その子どもの前の姿と比較したり、５領域や教育課程を参考にする
- 普段から、子どもの姿に「いいな！」と思うのはなぜか考える癖をつけている
- 数をこなしたり、保育者の思いを入れて書くと、保護者からの良い反応がもらえた
- どんな姿でも子どもは育っているというレクチャーの内容を忘れないようにしている
- 自分なりに子どもの姿をたくさん集めると、育ちが見えてくる
- 他の保育者と一緒に子どもの姿を共有して考えてみることで、育ちの見取り方を具体的にアドバイスできるのでは？（園内研修の検討）

●ラーニングストーリーは、明日の保育に繋がっている？

以下は、左の写真を用いて５領域の「健康」と「人間関係」から育ちを見取ったものです。領域の選択や育ちの見取り方によって、その後の保育者の願いや、保育での環境構成にも違いが表れることが伝わると思います。



また、毎月クラスの子ども一人ひとりの写真を狙い、ラーニングストーリーを書くことで子どもの姿や育ちに応じて環境構成をするという癖付けが身に付いてきました。（例えば、「この姿からどんな育ちが考えられるかな？」「あ、今○○しようとしている、それなら■■を用意したらもっと○○の遊び方が広がるかな？」など）

ラーニングストーリーと同じ流れを頭の中で組み立て、今自分ができる関わり方や環境の出し引きを臨機応変に試し続けることで、子どもの更なる気づきや興味に繋がっているという実感を得ています。これこそ、ラーニングストーリーを導入する際の保育者へのねらいであった「子どもの姿ではなく、育ちを見とる目を育てる」「子どもの興味関心や育とうとしている力を基に、環境の再構成をする力を養う」が達成され始めている証ではないでしょうか。

●参考資料に目を通す機会が、理論に基づいた保育へと繋がる!?

また、ラーニングストーリーを作成する際は、様々な資料を参考にしており、「週案」や「個人記録」「発達過程」「教育課程」「幼稚園教育要領」など保育者によって様々です。

資料に書いてある文言をそのまま拝借するのではなく、自分の書こうとしている育ちが発達過程でいうとどの程度なのか確認したり、自分が見落としがちな領域について再度学ぶ機会にしたりしています。毎月これら資料に目を通すことで、育ちの見取りに理論的な説得力が出る実感や、読み取った文章を自分の言葉に再言語化することで、保護者対応で子どもの姿がより伝わっている実感へと繋がっています。

●今後、課題とどう向き合っていくか

ラーニングストーリーの取り組みが始まって早４年。保育者は、日常で写真や育ちを当たり前のように意識しながらテレワーク内で書き上げる習慣が付いてきました。また、保護者も連絡帳からラーニングストーリーへの移行に慣れ「うちの子、○○ばかり」という発言が「でも、先生がラーニングストーリーで○○も育ちって言ってましたもんね」とわが子への捉え方に変化が起こり始めている実感があります。ラーニングストーリーを始める際に挙げられた「保育者へのねらい」と「保護者へのねらい」が成果として少しずつ現れています。

しかし、毎年新しい職員を迎え、初めてラーニングストーリーを書く保育者は、皆が通って来た悩みや課題に直面しています。何度も書き続けて来た保育者も、自分の言語化が画一的になってきていることや学年によって育ちの見取りが変わる難しさに直面しています。

それらの悩みをチーム内で共有したり、アプリ配信や掲示で互いのラーニングストーリーを見合ったりしながら解消を目指していますが、最も効果的だと考えられるのが園内研修です。実際に顔を突き合わせて互いの意見を交えることで多くの学びがあります。

次項では「明日につながる保育になる記録とは？」「記録の内容や工夫って…」を、職員間で共有する一方法として園内研修を取り上げ、実践方法を紹介していきたいと思います。

Ⅲ．子ども理解を共有　　～園内研修～

記録を作成したり、保育をしたりする中で、それぞれの先生達の思いや記録、子どもの育ちを他の先生と共有したい！子ども理解を深めたい!!という思いで園内研修の場をつくっていますが、いくつかの問題点が出てきました。

＜問題点＞

○研修の時間が確保できない

○実のある（成果を感じられる）時間になる？

○先生達の園内研修に対する捉え方や意欲が違う

＜問題解決に向けて＞

○研修（振り返り）の時間が確保できない

業務の効率化を図り、その業務の必要性や時間管理を考える機会を設けました。具体的には研修や振り返りを日々の業務時間内に計画的に、又は日常業務として取り入れる、といったことです。

また、記録や成果物をWeb上での共有にすると、時間の削減にもなり、いつでも見られたり、見返したりできる便利さや気兼ねなくできるというよさがありました。

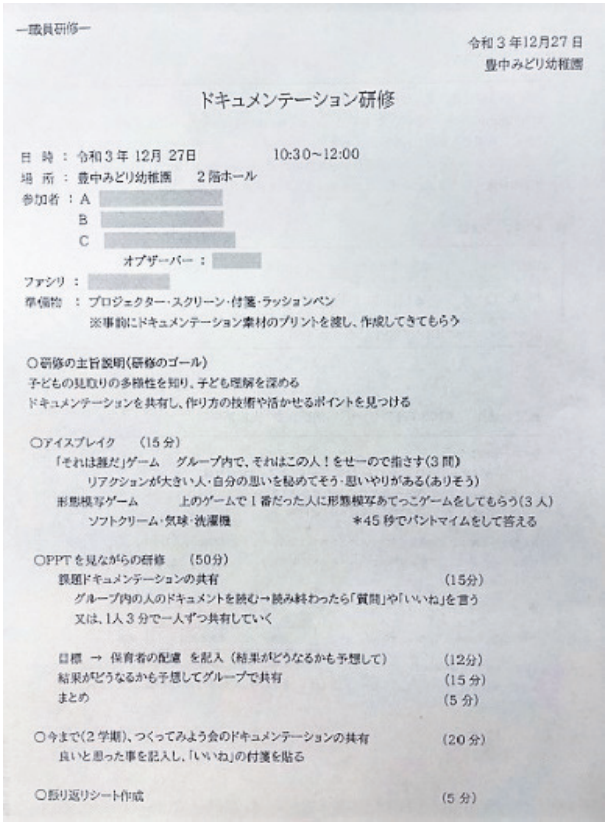
○実のある（成果を感じられる）時間になる？

研修テーマをなるべく職員の中から出ている悩みや保育の重点項目に沿ったものにしました。また、研修も時間やその研修のゴールを明確化したり、事前に出した簡単な課題を持ち寄って話し合うなど無理なく効率よく進められるようにしたりしました。また、研修方法も写真を使い、参加者が子どもを中心に考えられるようにしたり、肯定的な対話を重視し、思いを伝えやすく意欲的に参加できる雰囲気づくりなどにも配慮していきました。

○先生達の園内研修に対する意欲やベクトルが違う

実施した研修をフィードバックし、改善しながら何回か継続していくことで、研修をする意味や成果が感じられることを意識して取り組むようにしています。

＜実践編＞



―職員研修―

令和３年12月27日
豊中みどり幼稚園

ドキュメンテーション研修

日　時：令和３年 12月 27日　10:30~12:00
場　所：豊中みどり幼稚園　２階ホール
参加者：A
B
C
オブザーバー：
ファシリ：
準備物：プロジェクター・スクリーン・付箋・ラッションペン
※事前にドキュメンテーション素材のプリントを渡し、作成してきてもらう

○研修の主旨説明(研修のゴール)
子どもの見取りの多様性を知り、子ども理解を深める
ドキュメンテーションを共有し、作り方の技術や活かせるポイントを見つける

○アイスブレイク　(15分)
「それは誰だ」ゲーム　グループ内で、それはこの人！をせーので指さす(3回)
リアクションが大きい人・自分の思いを秘めてそう・思いやりがある(ありそう)
形態模写ゲーム　上のゲームで１番だった人に形態模写あてっこゲームをしてもらう(3人)
ソフトクリーム・気球・洗濯機　＊45秒でパントマイムをして答える

○PPTを見ながらの研修　(50分)
課題ドキュメンテーションの共有　(15分)
グループ内の人のドキュメントを読む→読み終わったら「質問」や「いいね」を言う
又は、1人３分で一人ずつ共有していく

目標 → 保育者の配慮 を記入（結果がどうなるかも予想して）　(12分)
結果がどうなるかも予想してグループで共有　(15分)
まとめ　(5分)

○今まで(2学期)、つくってみよう会のドキュメンテーションの共有　(20分)
良いと思った事を記入し、「いいね」の付箋を貼る

○振り返りシート作成　(5分)

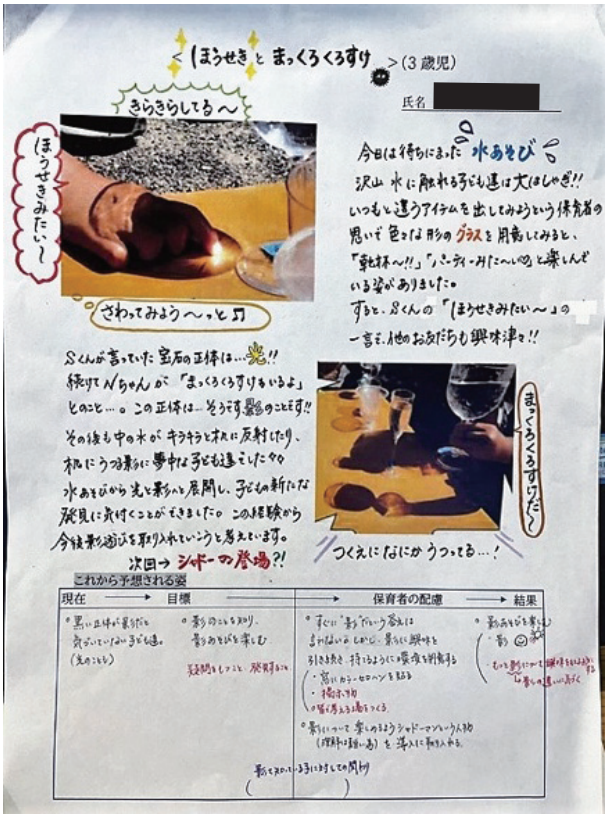
【ドキュメンテーション研修】

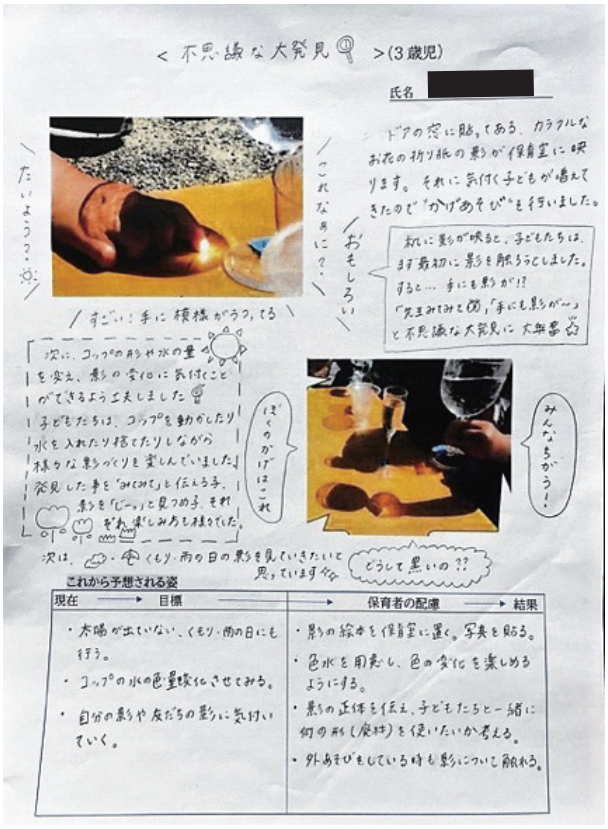
＊事前に課題ドキュメンテーションを作成しておく

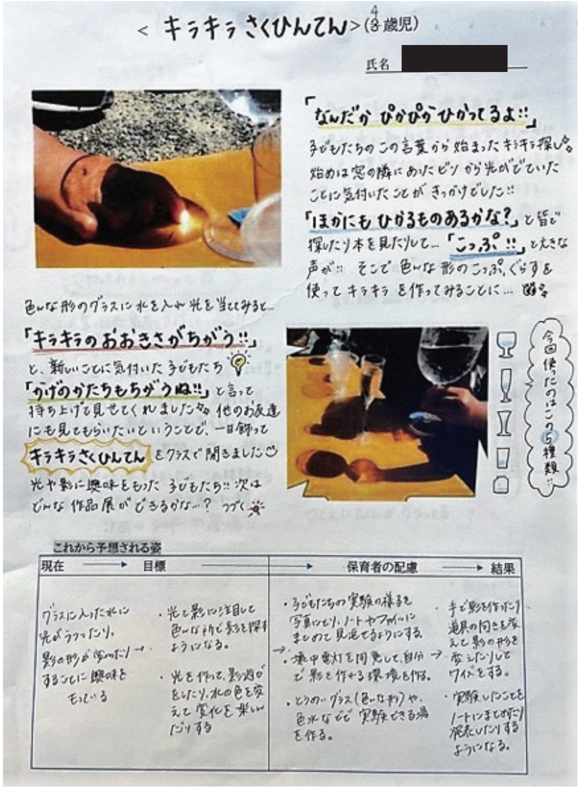
- アイスブレイク
- PPTを見ながら課題ドキュメンテーションを共有する
- その姿から見るこどもの育ち、短期目標、保育者の配慮、予想されるこどもの育ちなどを記入し、グループで共有
- 自分たちの作成しているドキュメンテーションを共有し、付箋を貼っていく
- 振り返りシートの記入

全員の作成したドキュメンテーションは掲示する

○いろんな書き方や見取りがあって面白い！







< キラキラ さくひんてん >（4歳児）

氏名 [redacted]

「なんだか ぴかぴか ひかってるよ!!」

子どもたちのこの言葉から始まったキラキラ探し。始めは窓の隣にあったビンから光がでていたことに気付いたことがきっかけでした!!

「ほかにも ひかるものあるかな?」と皆で探したり本を見たりして…「こっぷ!!」と大きな声が!! そこで色んな形のこっぷ、ぐらすを使ってキラキラを作ってみることに…

色んな形のグラスに水を入れ光を当ててみると…

「キラキラのおおきさがちがう!!」

と、新しいことに気付いた子どもたち

「かげのかたちもちがうね!!」と言って持ち上げて見せてくれました。他のお友達にも見てもらいたいということで、一日飾って

キラキラさくひんてん をクラスで開きました

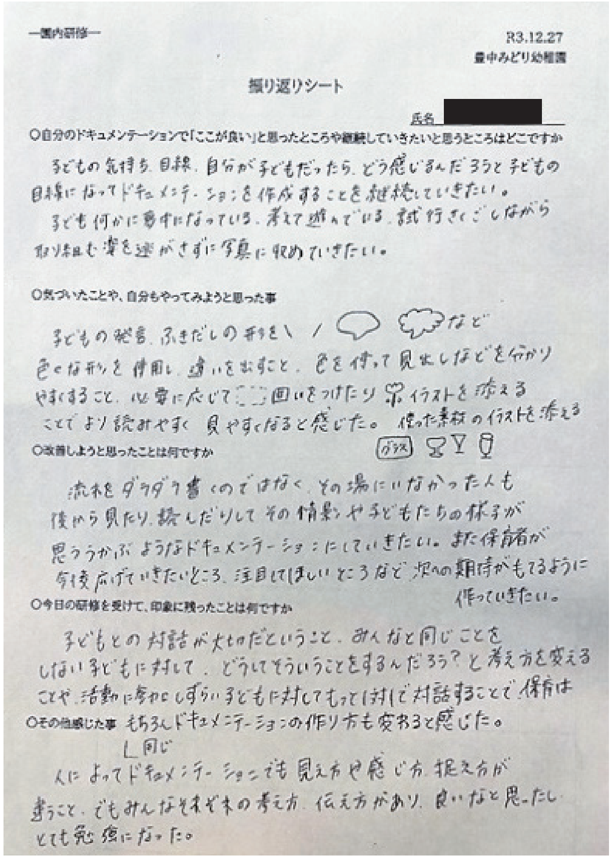
光や影に興味をもった子どもたち!! 次はどんな作品展ができるかな…? つづく

今回使ったのはこの5種類

これから予想される姿

現在 →	目標 →	保育者の配慮 →	結果
グラスに入った水に光がうつったり、影の形が変わったりすることに興味をもっている	・光と影に注目して色んな所で影を探すようになる。 ・光を作って、影遊びをしたり、水の色を変えて変化を楽しんだりする	・子どもたちの実験の様子を写真にとり、ノートやファイルにまとめて見返せるようにする。 ・懐中電灯を用意して、自分で影を作れる環境を作る。 ・色んなグラス（色んな形）や、色水などで実験できる場を作る。	・手で影を作ったり道具の向きを変えて影の形を変えたりしてクイズをする。 ・実験したことをノートにまとめたり発表したりするようになる。

○振り返りシートを作成して、今日の研修を活かす具体的な手立てを見つける



―園内研修―

R3.12.27

豊中みどり幼稚園

振り返りシート

氏名 [redacted]

○自分のドキュメンテーションで「ここが良い」と思ったところや継続していきたいと思うところはどこですか

子どもの気持ち、目線。自分が子どもだったら、どう感じるんだろうと子どもの目線になってドキュメンテーションを作成することを継続していきたい。

子ども何かに夢中になっている、考えて遊んでいる、試行さくごしながら取り組む姿を逃がさずに写真に収めていきたい。

○気づいたことや、自分もやってみようと思った事

子どもの発言、ふきだしの形を など色々な形を使用し、違いを出すこと。色を使って見出しなどを分かりやすくすること。必要に応じて囲いをつけたりイラストを添えることでより読みやすく見やすくなると感じた。使った素材のイラストを添える グラス

○改善しようと思ったことは何ですか

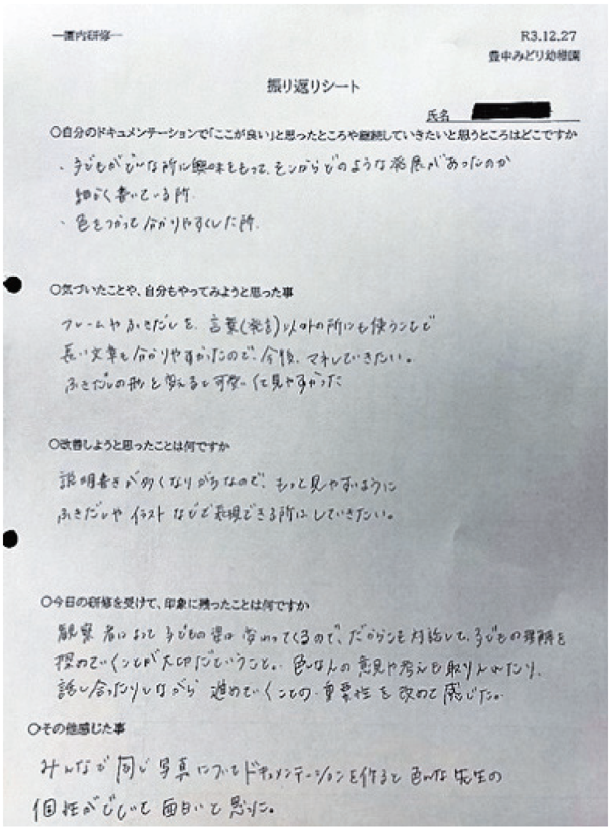
流れをダラダラ書くのではなく、その場にいなかった人も後から見たり、読んだりしてその情景や子どもたちの様子が思いうかぶようなドキュメンテーションにしていきたい。また保育者が今後広げていきたいところ、注目してほしいところなど次への期待がもてるように作っていきたい。

○今日の研修を受けて、印象に残ったことは何ですか

子どもとの対話が大切だということ。みんなと同じことをしない子どもに対して、どうしてそういうことをするんだろう？と考え方を変えることや、活動に参加しずらい子どもに対してもっと対話することで保育はもちろんドキュメンテーションの作り方も変わると感じた。

○その他感じた事

同じ人によってドキュメンテーションでも見え方や感じ方、捉え方が違うこと。でもみんなそれぞれの考え方、伝え方があり、良いなと思ったしとても勉強になった。



―園内研修―

R3.12.27

豊中みどり幼稚園

振り返りシート

氏名 [redacted]

○自分のドキュメンテーションで「ここが良い」と思ったところや継続していきたいと思うところはどこですか

・子どもがどんな所に興味をもって、そこからどのような発展があったのか細かく書いている所

・色をつかって分かりやすくした所

○気づいたことや、自分もやってみようと思った事

フレームやふきだしを、言葉（発言）以外の所にも使うことで長い文章も分かりやすかったので、今後、マネしていきたい。ふきだしの形を変えると可愛いし見やすかった

○改善しようと思ったことは何ですか

説明書きが多くなりがちなので、もっと見やすいようにふきだしやイラストなどで表現できる所はしていきたい。

○今日の研修を受けて、印象に残ったことは何ですか

観察者によって子どもの姿は変わってくるので、だからこそ対話して、子どもの理解を深めていくことが大切だということ。色んな人の意見や考えを取り入れたり、話し合ったりしながら進めていくことの重要性を改めて感じた。

○その他感じた事

みんなが同じ写真についてドキュメンテーションを作ると色んな先生の個性がでていて面白いと思った。

研修での気づき・成果

「ドキュメンテーションの書き方の工夫がわかった」

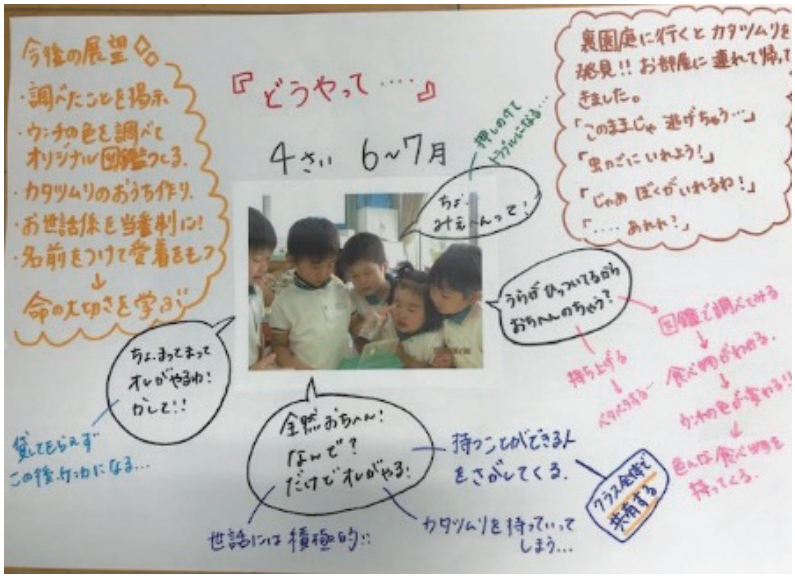
「作成する意味を考えられるようになった」

「ドキュメンテーションを作成することで、子どものみならず、保育者間での対話があると感じた」

など

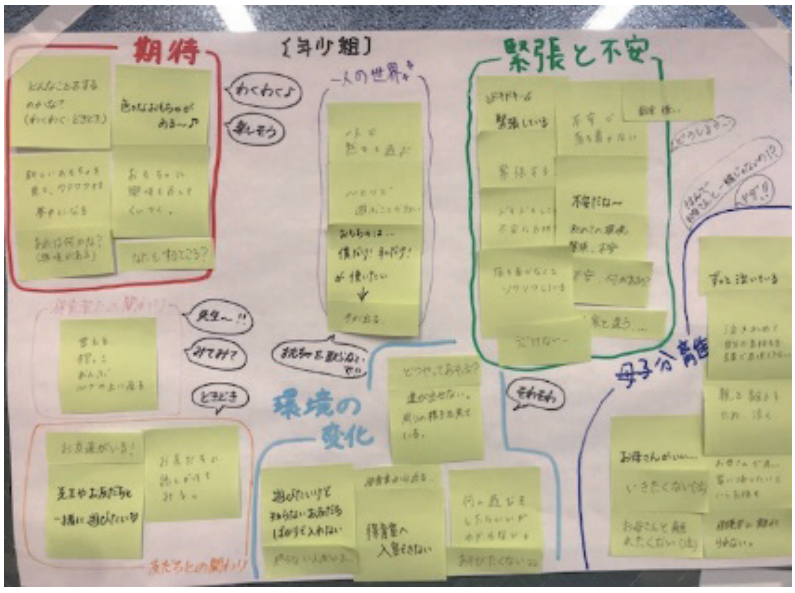
研修テーマ

「こどもってどんなん？」



「研修風景」

「４月の子どもの姿」



＜研修の成果＞

園内研修について、職員に下記のアンケートを取って結果をまとめました。

職員アンケート

園内研修について

1 内容は理解できたか　　全員「はい」

・子どもの育ちを理解する
・子どもの育ちを理解する（子ども理解）
・子ども理解した上に環境や保育者対応、関わりなどを考える
・子どもや保育者自身の保育の振り返り
・自己研鑽と同時に他職員との意見交換・共通認識の場
・より良い保育を目指し、教員、保育の資質向上
・自分と同じ考え方、異なる考え方がある事を知る。

2 研修を受けて印象に残ったことはありますか　　全員「ある」

・基本的なことが学べ、自分で調べるきっかけになった
・いろんな先生のドキュメンテーションをみて、クラスの取り組みや先生の思いが伝わった
・ドキュメンテーションは保護者に向けたものだと考えていた。子ども向けに保育で活用することに気づけたこと
・自分の保育を見直すことができた
・自分とは違った視点から子どもの姿を読み取る事が出来た。普段から意見交換をすることで多様な考えが知れるのではないかと思う
・普段何気なくとっている写真でも、見返してみると子どもの色々な姿が見られて再発見できるところがあったり、用意された写真でもその時の状況を想像して考えてグループで話し合うと他の先生の意見や思いを知る事ができて面白かった
・写真1枚で子どもの姿を感じ取ったり、保育者のかかわりを考えたりじっくりと考える事ができて面白かった
・写真を用いることで、子どもの感情を想像したり、成長や変化を読み取ったりもできるということ。見方を変えることで子供の成長や感情は1つではないという事

3 園内研修をやって日々の保育に活かせられましたか

はい　9名　　わからない　1名

・子どものその姿、言葉からこどもの思いや育ちを理解するための手段
・ドキュメンテーションを見る側の立場になって考えるところから、要点を抑えながら簡潔に伝えるというところ
・子どもの声を読み取ろうとするところ
・人に伝える材料の一つとして使われる写真（子どもの見取り）の大切さ
・環境構成や、こどもに対する援助の仕方など、他の職員の考えを自分の保育に取り入れることができた
・子どもの気持ちをよく想像したり考えたりできるようになってきた
・他の先生方が作成したものを見て勉強になる。子どもの姿を知るとても大切なツールであると感じ、作成するときの心構えが変わった
・写真を撮ることで子ども達の様子を振り返る事が出来たり、子どもの姿を考えて環境づくりをしたりできるようになった
・環境を作る時に、絵本やパズルは壁側に設置したり、ブロックや魚釣りはオープンスペースに設置したりして環境構成をすることができた。
写真を見返すとき、子どもの状況や心情を考える事ができた。

4 今後実施したい園内研修は

・ドキュメンテーション（2）
日々作成したドキュメンテーションを使って話し合う
・保護者支援
・仕事の悩み
・戸外、食育（2）について
・人とのコミュニケーションの取り方
・保育事務の仕方
効率よく進められるのか、いろんな先生の意見を聞いてみたい
・支援が必要な子やクラスで気になる子について
・環境構成やコーナーの展開について

5 その他園内研修について思うこと

・短時間で納得がいくまで同じテーマの研修をする
仕事に余裕がある時期にあらかじめ設定し、短時間でもこまめに集まる
意識づけして学ぼうとする意識を湧くようにする
振り返りシートやアンケートで随時確認
・グループでの発表の時間が長い。要点のみで後は資料を見返すだけでもいいのでは
・園外とは違って少しリラックスした雰囲気の中で受けられ、とても勉強になる事が多く気づきも多い。
・他の先生の意見も知ることができていい機会だと毎回感じる。
・付箋で意見を共有する方法は、気楽に意見を出しやすい
・研修時間をもっと定めてもらえると延長保育担当の先生と円滑に連携がとれる

＜成　　果＞

「職員の素直な気持ちが知れた」「悩んでいたのは自分だけじゃない」
「疑問に思うことは一緒だったんだ」「こどもの姿の見取りに新たな発見があった」
「こういうのを子ども理解って言うんだ！」「私、こういう言い回しばっかり使ってた！」
「Web上だから、いつでも見られて便利！」「あの先生の書き方、取り入れてみよう」

子どもの姿・自分の書き方・保育を客観的に見つめる機会になり、
それが学びや自信に繋がった！

＜これからの課題＞

○さらなる時間や研修の効率化

写真や書類等の共有をWEBを使うことで、時間の短縮ができ、気軽に行えるようになるため、時間を合わせなくてもたくさんの職員が共有することができ、研修機会も増やすことができました。

○「やりたい」「書きたい」「続けたい」記録づくり

こどもを中心とした視点で写真を使って記録をすることで、たくさんのこどもの発見や気づきがわかり、保育が楽しくなります。改善しながら継続していくことで、課題も見えてきます。さらにそれを共有し、共に学び合うことで保育の質の向上につなげていきたいと考えます。

【まとめ】

２年間のプロジェクトの中で、グループ内で他園の様々な取り組みを聞き、自園でどのように取り組むことができるのかを各自考え、取り組んできました。『仕事の効率化』をすることで、限りある時間を大切に使い、保育の振り返りや記録を短時間に共有しあうことや、『園内研修』では、様々な視点を知ることができ互いに尊重し視野を広げ『子ども理解』『子どもの育ち』を知り，深め合うことができることがわかりました。

グループ内の園では、このプロジェクトをきっかけに自園の記録を振り返り、記録の方法や職員間の関わりの時間を『必要な大切な時間』と捉え、園内研修を積極的に行うようになり、職員間の交流が増え、保育者の子どもに対する思いや考えを知り、職員間で共有し、より一層子ども理解が深まりました。

『無理なく継続すること』は、急な変更や改善は難しいけれど、意識を変え互いに知ることから始めると、今まで気が付かなかったことに気が付き、イメージが変わり、「もっと伝えたい」「聞いてほしい」「知りたい」「なんでだろう」疑問や発見、課題なども見えてきました。子どもの見取りや子ども理解を深める中で、職員間の会話が増え、コミュニュケーションが取りやすくなり、職員のモチベーションが大きく変わったと考えます。別の園では、PDCAサイクルで考える保育記録の実践に取り組み始めた園もあります。新しく取り入れることに反発や「できるのかな」という不安もありますが、取り組む中で子どもの姿がどのように変わってきたのかが分かり、保育者自身が「伝えたい」、「聞いてほしい」、「保育が楽しい」と実感できます。

園の環境によって取り組み方は様々ですが、それぞれの「試してみたい」を第一歩に、見たい！知りたい！伝えたい！『明日に繋がる保育記録』へと繋がっていきます。

おわりに…

おわりに

－Words create world（言葉が世界を創る）－

２年間の第29次プロジェクトに関わらせていただいたことは、本当に貴重な経験になりました。まずは記録の可視化を通して、各園で取り組まれたことに敬意を示します。その上で、少し俯瞰して、第29次プロジェクトの意味について、次の４点から述べていきます。

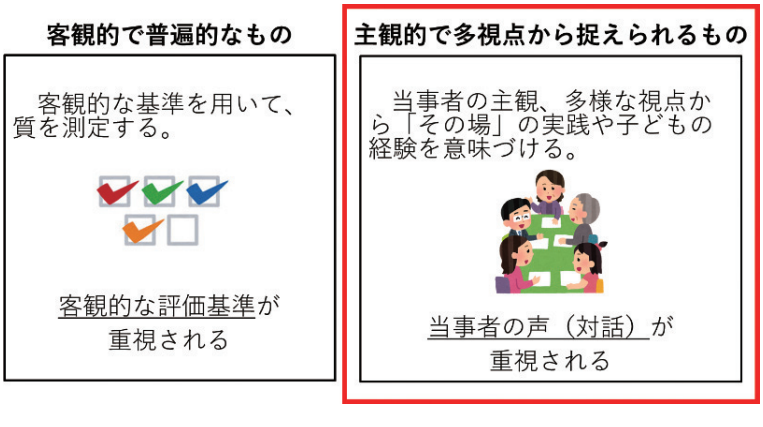
１．幼児教育・保育の質

本プロジェクトは、各園でのアクションリサーチをもとに、参加者相互が学び合うことを基本として進みました。その中で、各園での実践の変化、言いかえれば、各園の幼児教育・保育の質の変容があったことが大きな成果だと考えられます。

幼児教育・保育の質の観点からいうと、一定の指標を用いて参加園の幼児教育・保育に優劣を付けたというわけではなく、各園で大切にしてきた理念や実践の意味が、それぞれの場で変容したということになります。したがって、「可視化した記録に先進的に取り組んだ園は素晴らしく、まだまだ今からの園はそういった園に追いつけるように頑張りましょう」ということではありません。それぞれの園が、それぞれの事情の中で、保育者・保護者・子どもを中心に理念や実践を見直した点に価値があります。

これは、質をどのように測るのかという議論に関係します。保育の質の議論の中では、下記の図のように、２つの立場が示されています。一つが、保育の質を客観的で普遍的なものとして考える立場で、もう一つが、保育の質を多様で、主観的で、多視点からとらえられるものとして考える立場です。

前者は、「良い保育は普遍的に存在する」ことを前提とします。今回のプロジェクトでいえば、可視化した記録に関する取組のレベルを数値化し、点数が高い方が優れた園とする見方といえるでしょう。一方、後者は、「良い保育は各保育現場の地域の文化や園の特性によって変わる」ことを前提とします。そこで、各保育現場の保育者に良い保育とは何かを問い続ける仕組みのもとで当事者同士が対話をすることによって、実践の価値を見いだすことを目指します。本プロジェクトでは、可視化した記録に取り組む中で、各園で今までの記録との違いについて、保育者、保護者、子どもの立場から見直しが行われました。これは結果を数値化できるものではなく、それに取り組んだ過程と当事者の実感に価値があるものです。



第29次プロジェクトの第１グループでは、「保護者に伝えたい育ちの過程」をテーマに取り組まれてきました。結果が見えにくい場合、過程

とそれを共有・対話することに価値を置くというのは、子どもの育ちも園の幼児教育・保育の質の変容も同様です。

2．子どもの見方と味方

記録の共有と対話は、子どもの見方を変え、味方を増やすことになったのではないかと考えています。記録の様式、そして、そこで出てくる言葉は子どもの見方の方向性を指し示します。第29次プロジェクトでは、可視化した記録としてさまざまな例が出てきました。ドキュメンテーション、ラーニングストーリーと呼んではいても、一括りにはできないような各園でのオリジナリティがありましたし、写真や動画についても、それぞれの知恵の中で模索され、活用されてきました。

人は、言葉によって思考の制約を受けます。子どもの見方についても同様です。例えば、皆さんが、私に対して、クラスにいる一人の気になる子どものことを説明する場合、どのような言葉を用いて説明するかを考えてみてください。

おそらく多くの人は、「４歳児の男児で、車が好き、身体を動かすのが得意、落ち着きがなくて、先生の話を聞けないのが課題」といった感じで、大きなカテゴリーから絞り込みをかけて限定していくような説明をするんじゃないかと思います。そういった説明を受けた私は、それまでに出会ってきた子どもたちの中で、その説明に該当する子どもを思い浮かべて、「なんとなく」こういう感じの子どもかなと理解しようとします。さらに言えば、実際にその子に会ったとき、予め自分がイメージした子ども像に寄せていくような見方をしてしまうこともあります。

そういった見方は、本来の意味での「その子らしさ」を発見することを阻害してしまいます。その子らしさとは、「一般的な説明を積み重ねても説明しきれない何か」の中に存在しています。そして、その何かとは、「その子だけの固有で詳細なエピソード」です。可視化した記録と対話は、「その子だけの固有で詳細なエピソード」の言語化を促すものではないかと思います。つまり、保育者や保護者が、その子どもらしさを理解するような見方を形成し、その子どもらしさを活かす味方になると考えられるように思うのです。

第29次プロジェクトの第２グループでは、写真と動画という記録の違いによって、子どもの見方がどのように変わるのかを検討されました。可視化した記録の中でも、どのような言葉が生まれ、どのように子どもの見方に影響を及ぼすのか、非常に重要な観点です。

3．アセスメントとしての意味

子どもの学びをアセスメントするのは、保育者だけでよいのでしょうか。一般的なアセスメント（形成的評価）の理解は、子どもの発達的側面や心理的側面を専門的な知見をもった大人が読み取ることとされているように思います。しかし、アセスメントの目的に照らして考えてみると、視点を変えて考えることもできます。アセスメントの目的は、「その子どもの生活が少しでもよい方向に進むヒントを得ること」にあります。つまり、一人ひとりの子どもが次の一歩に前向きになれる機能を有していれば、形はどうあれアセスメントといえるのではないでしょうか。そして、子どもが次の一歩に前向きになれるのは、大人から適切な援助を受けたときに限りません。子どもたちは、

自ら次の一歩を踏み出そうとしています。

可視化した記録には、子どもも共同編集者として参画するという特徴があります。これは、従来の記録と位置づけが変わります。作り終えた記録の中に価値を見いだすのではなく、作る過程も含めて価値を見いだすことになります。子どもにとっての可視化した記録は、自分の姿が描かれたものに加え、他者と一緒に遊びを振り返る媒体であり、自分の考えを表現する媒体でもあります。つまり、記録の存在自体が、子どもの次の一歩を支えるともいえます。

	従来の記録	可視化した記録
作成者	保育者	保育者＋保護者＋子ども
機能	保育者が記録を書き、次の生活に向けた援助の手立てを考える。	子どもも記録の書き手となり、記録を作る過程も生活に含まれる。

第29次プロジェクトの第３グループでは、最終的に子どもたちもドキュメンテーションの作り手となった事例も研究の対象になりました。これは、子どもの育ちを見るものさしは、大人だけで作れるものなのか、というラディカルな問いを含んでいて、従来のアセスメント観を変える次の一歩を踏み出したことを意味しています。

４．園の組織開発

幼児教育・保育において、記録は重要な機能を持ちます。可視化した記録が、当事者間の対話を引き出し、園内研修に活用されることは、しばしば園の仕組みに影響を及ぼすことになります。対話型組織開発の理論でいえば、「創造的破壊」といわれます。これは、新たな有用な方法が生み出されれば、それと同時に古い方法は駆逐されていき、組織の中で新陳代謝が活発になる現象です。

可視化した記録に限らず、新しい方法に取り組む際には、誰しも少なからず抵抗感が生まれるものです。そういったとき、創造的破壊を起こすために何が必要になるのか。それは、従来の思考や前提、会話の中でよく使われる言葉や語り方に疑問をもち、それを壊すことから始めます。例えば、多忙な保育現場では、常に「忙しい」中で仕事をし、何か新しいことをするとなれば「難しい」という言葉が口をつき、「できそうにない」という語り方で話が進んでいく。こういった「忙しい」「難しい」「できそうにない」という従来の思考や前提から生まれる言葉を、「時間は作れる」「挑戦しがいがある」「意外とできそう」という言葉に変えることが重要です。

第29次プロジェクトにおいても、当初は可視化した記録に取り組むときの負担について話題になることが多く見られました。実際にやってみたいことはあるけど、うちの園ではここまでのことはできないということもありましたし、園内の保育者の協力が得られにくいという話もありました。ただ、グループで話をする中で、語り方が変わってきたのではないかと思っています。「無理なくやること」「続けられる方法を見つけること」を探す中で、自然と「できそうにない」から「なにができるか」という語り方になり、それぞれの園で大なり小なり創造的破壊が起こったのではないかと思います。

第29次プロジェクトの第４グループでは、可視化した記録に取り組む中で、園内での研修や記録

の取り方に関する仕組みを見直した成果が示されました。これは、園内で創造的破壊を起こすことができた一つの証左ではないかと感じています。

冒頭に示した言葉であるwords create world（言葉が世界を創る）は、社会構成主義の考え方を表わしたものです。私たちは、今ある現実の中でそれぞれに考えがあって、それをもって他者と対話をしているという見方もあります。しかし、その逆の矢印もあって、社会構成主義では、対話によって現実が創られるという見方をします。

第29次プロジェクトでは、可視化した記録の中で生まれた対話によって、子どもの育ちを共に喜び合うという現実が創られたのではないか。そして、プロジェクトのチームで２年間してきた対話によって、各園で可視化した記録を実践するという現実が創られたのではないか。そんなことを密かに思いながら、第29次プロジェクトの皆様と対話できた現実を喜びたいと思います。

第29次プロジェクトチーム　研究紀要

2022年９月発行

発行者　理　事　長　奥野　宏
教育研究委員長　杉本圭隆
教育研究所長　岡部祐輝

発行所　一般社団法人　大阪府私立幼稚園連盟教育研究所
大阪市都島区網島町６－20　大阪私学会館
電話　06-6351-5574㈹

印　刷　川西軽印刷株式会社

研究紀要

第29次プロジェクト

一般社団法人　大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

第29次研究プロジェクト

研究紀要

『子どもの育ちを喜び合う記録の開発と検討』
～子どもや保護者と共有するための可視化や発信～

令和４年９月

一般社団法人　大阪府私立幼稚園連盟教育研究所